東方夢現紀

水銀の使い手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方夢現紀

【Ｎコード】
Ｎ２５４６Ｒ

【作者名】
水銀の使い手

【あらすじ】
幼少期のあの頃からずっと見てきた夢。だが今回の夢は何か違った。頭に謎の声が響き『旅をしますか？』と聞いてきた。
この小説は駄文、ご都合主義、主人公最強、キャラ崩壊などがあります。嫌いな方は見ないほうがいいです。突然、のどを掻きむしりたくなる衝動に襲われます。
あと更新速度は蛞蝓よりも早く陸亀よりも遅いです。

夢の中で…（前書き）

駄文ですが、どうぞ

夢の中で…

私は夢を見ている。…いや、夢を見ているという表現はおかしいと思うが確かに夢を見ている。紹介が遅れたが私の名前は青山刹那。口調はアレだがれっきとした“男”だ。友達から「どちらかというと“男の娘”だよなw」と言われて、パイルドライバーを決めた私は悪くない。断固として私は“男の娘”ではない“男”だ！

コホン…話しを戻そうか。実は私はこの夢を見るのは初めてではない。初めて見たのは幼少期の頃、海で溺れて死にそうになった時だ。その日からずっと、私はこの夢を見続けている。

その夢というのは、何も無い真っ白な空間にポツンと私一人が佇んでいる。大声を出しても返事は返っては来ず、出口を探そうと走り回って見ても出口も何も見つからない、そんなただの空間。だが今回の夢はナニカが違う。そんな気がした。何故かは解らないがそんな“気”がするのだ。

私はそれは気のせいだろうと、とくに深くは考えたりはせず、本体が起きるのを待っていると、突然頭の中に声が聞こえてきた。

―旅をしますか？―

……はっ？突然頭の中に聞こえてきた言葉に私は唖然とする。

―旅をしますか？―

選択肢

↓はい　ＹＥＳ　ｏｋ

いやいやいや、旅をするって何処によ！？つか、選択肢に『いいえ』がねぇし！強制ですか？強制なんですか？！強制なんですね、わかりたくありません。

―何処に旅をしますか？―
↓東方　ネギま！　恋姫

あ、ここでその質問がくるのね。つかやっぱり強制かよ！？ひどっ！てか選択肢が全て死亡フラグ満載じゃねぇか！？

―何処に旅をしますか？―
↓東方　ネギま！　恋姫

…はぁ。いいよもう…。それにしてもどうしようか…。『ネギま！』だと、戦時中に旅することになったら流れ弾に当たって死にそうだし、それに正義を謳う痛い連中とか嫌いだしな～。つか野菜が一番嫌いなんだけどね。だけど、月詠とか千雨とかザジとかチャチャゼロとか結構好きなんだよな～。ん～…悩むな。『恋姫』の場合は、一番死亡フラグが満載なんだよな。第三の勘が十中八九、戦闘に巻き込れてると告げているしよ。だけど将軍さんは美人なんだよな～。恋とか華雄とか秋蘭とか結構好きなんだよね～。ん～…ホント悩むな。だけど、この中で一番死亡フラグが低いのは『東方』なんだよね。此処で旅しても妖怪などにさえ出くわさなければ人里でのんびりと暮らせばいいしな。よし、決めた！『東方』をせんた…

―あまりにも遅いために多数決により旅先は『東方』に致しました―

くするって、うおぉぉい！！！？なに勝手に決めてんのよあんた！？てか多数決って？多数決ってなによ？！いるの？そこに誰かいるの？！…でも『東方』でよかったよ…。

―次に能力を決めます。あなたが欲しいと思う能力を二つ思い浮かべて下さい―

あ、能力とかは自由なんだ。つか、今思えば、運動とか一般人の少し上いくだけの私があの三つの世界のどれか旅しても、野垂れ死になるだけじゃね？逃げ足には自信あるが…。まあそれは置いといて、能力か…。あんまり思いつかんな。早く思い浮かべなければまた勝手に決められてしまう。最近読んでいたやつにいいやつあったっけな？主に回避系で…。

―ブッブー。時間切れの為、勝手ながら決めさせてもらいました―

はっ？時間切れ！？制限時間とかあったのかよ！？つか制限時間少なっ！？まだ考えてから３０秒程しか経ってないよ？！イジメか！これはイジメなのか！？イジメイクナイ！！

―能力は以下の二つです―

・めだかボックスの『異常』と『過負荷』。
・ＣＯＤＥ：ＢＲＥＡＫＥＲの『異能』。

―以下の二つでよろしいですか？―
↓はい　いいえ

……十分強いな、をい。『異常』の「自動操縦」と『過負荷』の「不慮の事故」があるだけで接近戦はなんとかなるな。それに『異能』の「絶対空間」があればデカイ攻撃の回避とかも楽になるし、「細胞再生」があれば傷も瞬時に回復するしな！確か、「細胞再生」は“細胞”で作られた組織を再生することが出来るから捜シ者は「心臓も再生できる」と言ったんだっけ？心臓も細胞から出来てるから再生が可能なのだろう。だとすると、骨とか筋肉とか血液とかも再生可能なのか？骨は骨細胞、筋肉は筋肉細胞、血液は血液細胞と

いうのがあると生物の教科書に載っていたからな！まあ、それは実証してみないと解らないことだから保留しておこう。願わくばそういった機会が訪れないことを願うがね。いや、そもそも『過負荷』の「大嘘憑き」がある時点で傷をなかったことにすればいいんじゃないか？だけど、それだとあまりおもしろくないからいざという時にだけ使おうとしよう。ただでさえ「大嘘憑き」は凶力だからな。まあ今はとりあえず選択肢に入力しなければ。

―以下の二つでよろしいですか？―

ピッ

↓はい　いいえ

―……登録完了です。特典として不老を追加させていただきました―

不老、か。年を老わないとは魅力的だな。あと長寿も追加してくれれば最高なんだが。…今気付いたんだが、口調が乱れているな。今さら直しても遅いし…このままでいいだろう。つか、今思えば何故旅をする話しになってるのだろうか？確かに、毎日日々変わらない生活に退屈を覚えているが、さほどではない。そもそも何故旅をしなければならないんだ？よく二次創作小説では、事故や神様の暇潰しとかで死んだ者が能力とか付け加えられて転生とかしていろいろな場所に行くのはわかる。だが、私の場合は死んでもいないし、現役バリバリに生きている。なのに何故？

―それでは良い旅を…―

その疑問を抱いたまま、私は現実へと引き戻された。そして次に目を覚ました時に見た光景は、家の天井ではなく、白き雲が浮かぶ晴天の天上であった。それを見て私は一言呟いた。

「なんでさ…」

ジュラ紀…だと…（前書き）

なんか変だな…

ジュラ紀…だと…

「此処は何処なんだ一体？」

私は起き上がり、ん～、と伸びをしながら考える。
解るとしたら此処は『東方』の世界だということだけだ。それ意外はわからない。
取り敢えず、私はそれ以外の情報を知るために歩くことにした。

景色を見ながらしばらく歩いていると、不意に私に影が覆った。なんだ？、と思い見上げると……――イビル・・ティラノサウルスがいた。

「Ｏｈ．．．」

よだれをダラダラ流しながらティラノジョーはこちらを見ている。
私はイビルサウルスを見て一時停止したが、直ぐさま起動して冷静に対処法を考える。時間は最短で、出来るだけ戦わずに、恐暴竜を対処する方法を考える。

Ｑ．逃走する。
Ａ．Ｎｏｎ，距離が無さすぎる。

Ｑ．戦う。

A．Ｎｏｎ，能力が上手く使えるか解らない。

Q．姿を隠す。

A．Ｎｏｎ，どうやって？

結論：現実は非情である。

ふっ：、と私は息をついて黄昏れようと明後日の方向を向こうとしたが恐竜の大口が迫ってるのに気付き、慌てて緊急回避をした。

「黄昏らせろよ！チクショー！」

私は上手く使えるかは不安だが、『音』の異能を使い音速で恐竜から逃走した。

結果は、何とか逃げ切ることに成功した。だが音速で移動したせいか若干気分が悪いし、服が所々破けてしまった。

「一応、能力は使えるっぽいな。使い熟すにはまだまだだが、時間は腐る程あるし、大丈夫だろう」

私は服の破けた部分を『大嘘憑き』で“なかった”ことにして、服を元通りに戻し、今後の事について考える。

イビル・ｊｙじゃなかったティラノサウルスがいるってことは今の時代はジュラ紀ということが解った。それと同時に幻想郷どころか妖怪すら誕生していない事も同じく解った。

妖怪とは人の畏れが実体化したものだ。人がいなければ妖怪もいない。だから妖怪はまだいないだろう。人と云う存在が生まれる迄はね…。

さて、やはり、まず最初は能力だな。能力を上手く使いこなす為にはまず練習が必要だ。時間はくさる程あるから大丈夫だろう。次に食料だな。生憎、サバイバルには多少慣れているからこれも大丈夫だろう。野生の熊とナイフ一本で戦ったことがあるからな。隙を見て急所に攻撃して何とか勝てたが。最後は寝るところだ。寝ている時に襲われた洒落にならんからな。一週間程度なら寝ずに動けるが、それ以降はさすがにきついな。

結論。

・能力の練習。
・食料の調達。
・寝所の捜索。
の三つだな。

取り敢えず、まず先にやるべきことは…

「腹減った。適当にアプト…生肉でも狩りに行くか」

食料の調達だな。

時が経つのは速い（前書き）

ディシディィア買おうかな？

時が経つのは速い

私が此処に来てから早３０００年が経った。
その３０００年の中で私が気付いたことを発表しようと思う。
まず最初は、私には霊力・魔力・妖力・気力の四つの力がある。これは偶然、座禅を組んで精神を集中している時に見付たものだ。とはいえ、その四つの力はまだ弱い。だから後で鍛えることにした。
次に『大嘘憑き』で“なかった”ことにしたことを“なかった”ことに出来る。つまり“戻した”ことを“戻す”ことが可能なのだ。１０００年程前にあるものを使って実験したら出来たからである。
閑話休題。
そんな私は３０００年の時間を費やして、ついに、全ての能力を使い熟すことができた！『絶対空間』の異能で次元を開き、スキマみたいに移動することも可能なのだ！（だが、まだ完璧では無いため成功確率はとてもじゃないが低いし、距離も短い）
それと、その３０００年の間に筋トレとかして身体を鍛えていたら大変なことになった。この間、某元・生徒会長が使っていた拳々破だけで恐竜に挑んでみたら勝っちゃったよ。しかも全身の骨を粉々に砕いてね。

だんだんと私は人間から離れていってるね。いや、３０００年生きている時点で人外か……ハハッ！

そうだ！気力を鍛えよう。どこぞのバグキャラみたいに『気合防御』とか使ってみたいし…。

そんなこんなで数億年が過ぎ、私の四つの力は「お前はバカか？」と言われそうなぐらいに増えたのであった。（ちなみに『気合防御』を覚えました☆）

久しぶりの人との会話（前書き）

なんか、駄文ですみまそ

久しぶりの人との会話

私はいつも通りぶらぶらと歩いていると視界に薄い膜みたいのが視えた。

「これは……結界か？」

私はそれに触れて改めて結界だと確認する。人払いの結界と同類なものだろう。此処だけ恐竜やらが近付いてきてないしな。……暇だしこの中に入るとしよう。

私はそう考えて、『知られざる英雄』をオンにして、魔力と妖力を隠し、霊力と気力を一般的にして結界内へと侵入した。

「なんというか……早くないか？」

数週間前までは縄文時代初期ぐらいだったというのに、この結界内は江戸時代初期ぐらいまでに時代が進んでいた。だけど家は竪穴式住居だった。バランス悪くね？

まあそれはさて置いて、何で此処だけ時代が進んでいるのかを調べるため情報収集しますか。

・
・
・
青年、情報収集中…
・

・
・
解ったことはこの結界は『結界を作る程度の能力』を持った術者が張っていて、その結界内の時間は外での一日が中では一年らしい。解りやすく言えば、『逆浦島太郎現象』もしくは『ダイオラマ魔法球』だ。そんで、ここまで時代が進んだ理由はもう一つある。それは、此処で生まれた天才と呼ばれている子供だ。その子供がいろんな物を発案・発明して、ここまで時代を進歩させたらしい。

「その天才って子、一目見てみたいな…」

言うが早いか私はその天才って子が住んでいる所へと足を運んだ。できれば『完全』を使って、その天才の知識とかを頂きたいな。

・
・
・

そこは竪穴式住居ではなく、和風の屋敷であった。屋敷全体を壁が囲っており、木でできたスライド式のデカイ門。門の奥には本家があるんだろうな…たぶん。勝手に入るのは悪いと思うので呼び鈴を押「私に何か用かしら?」そうとした時、後ろから声を掛けられた。あれ?『知られざる英雄』発動してるよね?そんな事を思いながら振り返ると、だいたい14，5才ぐらいの銀髪の少女がそこに立っていた。

「もしかして:私見えてる?」

恐る恐る私は少女に訊ねる

「ええ。はっきりとね。」

はっきり、とですかそうですか。
あれれ?おかしいな?『知られざる英雄』は誰にも目視出来ず、記憶に残されないはずなんだがな…。ある一定の条件を除けばの話しだが。

「だけど、少しずつ記憶から薄れていってるわね。それで私に何の用かしら?」

再度問い掛ける銀髪の少女。
あ、よかった。『知られざる英雄』はちゃんと発動しているようだな。だとしたら何故見られたのだろうか?まあそれはおいおい考えるとして、今は女性の質問に答えなければな。

「なに。ただ、天才と呼ばれてる子を見に来ただけさ」

嘘ではなく本当だ。それにしても、この顔はどこかで見たことが…ってこの子、永琳じゃないか!?まさか永琳に逢えるとはな…天才なのは納得だ。それと『知られざる英雄』が発動状態の私を見ることにも納得する。だって永琳だし…

「あら?その口ぶりだと、貴女は此処の人じゃないみたいね」

まあそう聞かれるだろう。実際、此処の人間じゃないし。そもそも、人間なのかすら疑問に覚える。だが、私は“まだ”人間だと自負している!…アレ?おかしいな?目から汗が…

「何で泣いてるのよ?」

「泣いてはない。これは心の汗だ」

「そ、そう…」

あれ?何でか永琳が引いてるぞ。何故だ?

「まあ、取り敢えず、確かに私は此処の人間じゃないな。さっき来たばかりだし…」

そう答えると永琳は驚いた表情をした。どうしたんだろうか?

「さっき来たばかりって…あの結界には何も反応なかったわよ?」

「ん?あの人払いの結界みたいなやつ、特殊な結界だったのか?」

「ええ。滅多に無いけど結界内に何かが侵入した場合、すぐにこの結界を維持してる者が気付いて、場所と位置を警備兵に報告し、その侵入者を排除しに行くわ」

「何それこわい」

いや、まあ、当たり前の事か。此処の場所平和だしね。

それにたぶん、私の存在に気付かなかったのは『知られざる英雄』が発動しているからだろうな。今も発動中出し。

「まあ、立ち話もなんだし入りましょう?」

「いいのか?見ず知らずの私を家に招いても?」

「大丈夫よ、貴女なら。見たところ此処に害を及ぼそうとしないみたいだし」

「及ぼそうとしたら？」

「問答無用に警備兵に報告するわ」

「だろうね。まあ、害を及ぼそうとかやわなことは考えてないから安心しな」

「でしょうね。それじゃあ入りましょう」

私は永琳に招かれて家に入ったのであった。

・・・・・・・

敷いてあった座布団の上に座り、テーブルを挟んで向かい側に永琳が座る。テーブルの上にはお茶ともなかが置いてあって、私はお茶を啜り飲んで一息つく。水以外の飲み物を飲んだのは何億年ぶりだろうか？お茶うまいな～。

「自己紹介がまだだったわね。私は八意永琳。貴女は？」

私がのほほんとしていると永琳が自己紹介してきたので、私もそれに返した

「私は青山刹那。一応言っておくけど、こんな口調だけどれっきとした“男”よ？」

「……解っているわよ」

いや、なんだよ今の長い間は…

「いや、気付いてなかっただろ？」

「そ、そんなことないわよ！
（このスタイルで男だとかありえないわ！そこらにいる女性に喧嘩売っているわね…）」

ホントかどうか確認するため『受信感度』で永琳の心を読みとった事を後悔した今日この頃。人が気にしている事を…。

「そうしといたるよ」

「だから…！
はあ、まあいいわ。ところで聞きたいことがあるのだけど、よろしいかしら？」

「答えられる範囲なら問題ない」

「じゃあ、質問は二つ。一つ目は何処から来たのか？二つ目は先刻の能力について、よ」

その程度なら大丈夫だな

「あいわかった。まず一つ目は、此処から出て真っ直ぐ行った所に恐竜がうじゃうじゃいる場所があるだろう？その場所の奥にある洞穴に住んでいる」

そう応えると永琳は驚いた表情をした。

驚くようなことを言ったか？

「恐竜がうじゃうじゃいる場所って、確か『恐竜の森』だったわね。その洞穴に住んでいるって……つまり、あなたがあの伝説の仙人なの！？」

永琳が考え込む仕草をしてたら突然テーブルを乗り上げて興奮気味に詰め寄ってきた。

伝説の仙人？なんだそれ？…つか顔近すぎだ！

「おｋ。とりあえず落ち着こうか永琳。それと顔が近い」

「あっ！ご、ごめんなさい！！／／／」

永琳は顔を赤くしながら元の位置に座った。かわいいな～…じゃなかった、しかし、伝説の仙人っていったいなんぞや？

「大丈夫だ、問題ない。

ところで、私が伝説の仙人ってどういうこと？」

「ああ、それはね？昔に……」

永琳が云うには、昔一人の子供が恐竜の森に、私が住んでいる森に、迷い込んだらしい。その森はとても危険な森らしく大人でも滅多に近寄らないらしい。その子供が何故その森に入ったのかというと、その子供の母親が重い病で苦しんでいてその病を治すことが出来る薬草が恐竜の森にあるのを知り、危険を承知して中に入ったらしい。木の陰や自分の小さい身長を上手く使ってやり過ごし、なんとか薬草を見つけてホッと一安心したのもつかの間、恐暴竜に見つかってしまったらしく全速力で逃走。だけど子供の体力じゃ恐暴竜から逃

げ切られるはずなく、途中で転んでしまい窮地に立ってしまう。子供は恐怖に怯えて後退り少しでも距離を取ろうとするが差が開くはずがなく、子供に恐暴竜の大口が迫る。子供を死を覚悟して目をつぶる……が、何も来なくて恐る恐る目を開くと恐暴竜をアッパーカットしている女性の姿の光景を目にしたらしい。その後、その恐暴竜はその女性にタコ殴りにされて追い払われて、子供は無事家に帰れたらしい。子供を家まで送り付けた女性は名も言わずに忽然と姿を消した。以降、恐竜の森には仙人がいると噂されてその噂が広がり伝説となった。というお話しだ。

あ～……たぶん、それ私だね。というよりか私しかいないね（笑）。あの時はいろいろと試していて睡眠不足だったからな～……かなりイライラしてたね。そんでイライラを解消するために睡眠を取ろうとした時に、あの恐暴竜が騒ぎ出したからな。それにぷちっ☆ときて、その恐暴竜の元に音速で向かって、昇龍拳をやった覚えがあるな。そのまま『イラつきが！おさまるまで！殴るのを！やめない！！』って言いながら殴り続けて追い返したっけ？少しすっきりした後、帰ろうとしたんだけど子供が気絶していて、そのまま放置すんのもなんだから分身体を作って、受信感度で子供の勝手に読み取って子供の親元まで運んだんだっけ？あんまり覚えてないな。

「うん、たぶんそれ私だわ。曖昧だけど記憶がある」

「ホント！？」

「ああ。話しは戻すが、二つ目は、私の能力の一つよ。名前は『知られざる英雄（ミスター・アンノウン）』。誰からも認識されず、記憶に残らない……はずだったんだけどね」

「私が気付いたというわけね」

そう認識されないはずだったんだけど、永琳に一発で見破られた。

「そゆこと」

「そう」

すると永琳は何かを考え始めた。

私は暇になったので皿に乗ってあった煎餅をバリボリと食べることにした。

「・・・ねぇ、あなたってずっと今に今まで独りだったのかしら？」

最後の煎餅に手を延ばそうとした時、突然永琳にそう訊ねられた。

私は延ばした手を引っ込めて、それに応える。

「まあ・・・そうだね。周りのやつらは恐竜とかそういった種しかいなかったからね、暇で暇でしょうがなかったよ」

カラカラと私は笑った

「寂しくなかったの？」

「ん～、寂しくはないと言ったら嘘になるな」

「そう。・・・ねぇ」

永琳は何かを決心したような眼で私を見つめてこう言った。

「私の家に住まないかしら？」

過ごす日々。そして別れ（前書き）

時間が跳びます。

そしていつも通りの駄文です。

過ごす日々。そして別れ

永琳から誘われて住ませてもらってから早くも数千年が経った。その数千年間に技術が急激に進展・進歩した。江戸時代初期から平成…いやそれ以上の時代になった。並び立つ高層ビル、浮かび上がる立体映像（ホログラム）、タイヤが無く空気で進み電気で動く自動車などなどだ。そしてその技術を設計したのは永琳だ。そのせいでか、永琳はいろんな組織から引っ張り凧になっている。なので永琳は家に帰ってくることが少なくなった。良い時には数ヶ月に1，2回、悪い時には数十年経っても帰ってこない時があった。

最近では『月移住計画』が立てられている。なんか『地上にいると穢れ（寿命）がつくから、月に行って穢れ（寿命）をなくそう！』と言うわけらしい……詳しくは知らんがそんな感じだったような気がする。あと数十年したら計画が実行されるらしい。私は永琳に月に行こうと誘われたが断っといた。寿命があるからこそ人生は面白いからね。偉い人にはそれが解らんとです。まあ、不老の私が何を言ってるんだって話しだけどね。

閑話休題

しかしその計画に一つ問題が発生した。それは『月移住計画』が始まる時期に妖怪の大群が襲ってくると未来詠み（さきよみ）の夜一（通称：よっちゃん）が予知したらしい。なら計画を早めれば！という意見があったが、よっちゃんによると計画を早めても襲撃してくるという未来は変わらないらしい。しかもその妖怪の数は数え切

れない程多いらしい。それを聞いたお偉いさん方々は頭を抱えた。だが、夜一が言う未来にはまだ続きがあった。大群の妖怪が襲撃してくるが月に移住する用の宇宙船は無事全て上がるらしい。その理由と云うのは、私だ。私がその妖怪の大群と戦って時間を稼いでくれてるらしい。それも兵を連れずにでっていうね。まあ戦うのは一人の方がやりやすいしね。逆に兵とか多人数だとやりにくいし、やる技が限定されるしな。んで、お偉いさんからの頼み？（つか命令）で私はその大群の妖怪と一人で戦争することになった。まあべつに月に行かないし、地上に残るから私はそれに了承した。永琳は私が一人でやるのを最後まで反対していたが、私と親友の月夜見で何とか説得した。

閑話休題。

まあ、なんやかんやで今日が『月移住計画』の日である。そして観測機からはよっちゃんの未来（よそう）通り妖怪の大群が此処に迫ってきていた。数は数百を超えていまだ増え続けているらしい。

―ドォォォンッ！

「最初のやつが打ち上がったか…」

爆音と轟音が響き私は空を見上げる。空には月に向かう一筋の飛行機雲が上っていた。

「さて、私もそろそろ行きますか」

私は観測機から送られてきた情報を読み取り、妖怪の大群が来る場所へと転移した。

「これまた、多いねぇ～」

観測機で観測された場所へと転移すると、まだ数ｋｍ先だが目測でも解るぐらいに妖怪の群れが見えた。数は随時送られる観測機の情報からだと千を超えて万に達するらしい。

どうしてそこまで増えるのかね？某死神漫画の虚みたいに手下を増やす能力を持った妖怪でもいるのか？それにしてもよくこんな数の妖怪が隠れていたもんだ。

「まあ、そんなこったぁ～どうでもいいね。今やるべきことは…」

私は制限していた“魔力”“気力”“妖力”“霊力”の四つの力を解除する。そして、右手に魔力と妖力を、左手に気力と霊力を集中

させて、それを合一させる！

「時間稼ぎだ！最初っからクライマックスだぜぃ！
全力全壊で逝くぜ！妖魔と霊気の合一『咸卦法・臣』！」

四つの反発する力が一つになり、白と黒のオーラが私を纏う。
『咸卦法・臣』とは、普通の咸卦法にさらに一手間を加えて強化した究極技法だ。耐火・耐熱・耐圧・耐震・耐暑・耐寒・耐状態異常・霊気魔妖力無効【中】がついて、さらに肉体魔強化・物理無効【中】がつく。
さらに私は異常の『光化静翔』と異能の『光』を常時発動状態にする。

「流石に、一対数万だと骨が折れるな。それに未だ増え続けているし……だったら！」

日之影の『アコースティックバージョン』と平家の『平家百式』を組み合わせる！

「即興！『百式音響』（今命名）！」

実体を伴った百の分身が現れた。
これで百対数万だ。それにしても…

「気合いでやれば出来るもんだな。
……っと、今はそんなことはどうでもいいな。一人百体殺るペースで逝けば、余裕で殲滅できるな」

私は次の宇宙船が上がるのを合図に妖怪の大群に突っ込むことにする。

――――そして……

――ドオォォォォン！

二本目の宇宙船が打ち上がり、それを確認するとともに私“達”は妖怪の大群へと光速で突っ込んでいった。

主人公設定

―初期―

名前：青山　刹那

性別：男（の娘）

年齢：１９才。不老。

容姿：黒髪黒眼、腰まである髪

服装：白黒の着流し

口調：定まってない。男口調の時もあれば女口調の時もある

性格：基本優しい、Ｓッ気あり

身長：１６８ｃｍ

体重：６０ｋｇ

能力：めだかボックスの『異常』と『過負荷』。ＣＯＤＥ：ＢＲＥＡＫＥＲの『異能』

力：平均の霊力・気力・妖力・魔力

―現在―

名前：青山　刹那

性別：男（の娘）

年齢：約２億歳。不老。

容姿：黒髪黒眼、腰まである髪

服装：白黒の着流し

口調：定まってない。男口調の時もあれば女口調の時もある

性格：基本優しい、Ｓッ気あり

身長：１６８ｃｍ（不老のため変化無し）

体重：６０ｋｇ

能力：めだかボックスの『異常』と『過負荷』。ＣＯＤＥ：ＢＲＥ

ＡＫＥＲの『異能』
力：バグ級の霊力・気力・妖力・魔力

一方通攻（前書き）

眠気眼で書いたから、なんか変になってると思う…。

いや、変なのは最初っからか…

一方通攻

「高速詠唱『幾千の雷／母なる大地』！」

魔力で生み出された黒雲から幾千の雷を落とし、大地から溶岩を噴火させて、妖怪の大群を殲滅していく。

「脆いわね。分身しなくてもよかったかもしれないな…」

ボソリと地上での戦闘は分身に任せて、空中に佇んで私はそう呟く。今の魔法で千以上ぐらいの妖怪が消えた。まあ、現在進行形で妖怪どもは私の分身によって消されているけどな。一人数十単位で。

『ナメルナ人間ガァァァァ！！！！！』

巨大な翼が生えた大量の妖怪が私に向かって飛んでくる。

「そっちこそ舐めるなよ雑魚どもが」

『水態』で私に近付いてきた妖怪どもの体内の水分を一瞬にして凍結させて、『空』で空圧を叩きつけて打ち砕いた。

「ハァ…。威勢の良いわりにはこの程度かよ……興冷めだ」

チラッと地上の戦闘を見る。私“達”の光速の打撃や蹴撃によって、妖怪どもの頭や身体が吹っ飛んで絶命しているのが見える。恐怖で逃げ出す妖怪がいたが、当然光速から逃げられることが無く、手刀を喰らって頭と首が泣き別れして絶命した。

「なんという一方的虐殺（ワンサイドゲーム）……これはひどいな（笑）」

とはいえ…、強さと速さでいえば私“達”が勝っているが、いかんせん数が多過ぎる。４割方消したが、まだ蟻ン子のように大量にいやがる。つか分身体を持続するのはそれなりの精神を集中させるし、咸卦法・臣は体力をかなり使うから早めに全滅して欲しいな。てか本当に仲間を殖やす虚的な存在がいんじゃないのか？

「あ〝ぁ～めんどくさい！大技やって一気に減らそう！」

私は百体の分身を消して、空高く手を上げる。分身が消えたことに妖怪どもは安堵の息を漏らし、すぐに空中にいる私を睨んできたが無視をする。

私は異能の『空（くう）』の完了型である『宇宙（そら）』を発動させた。

「堕ちろ！『落下星』！！！」

私は手を振り下ろす。

すると雲を突き破り、天空（そら）から無数の流星が大地に降り注ぐ。その流星は地上にいた妖怪を巻き込み、大地を爆ぜる。地上からは妖怪どもの阿鼻叫喚の叫び声が上がっているが、次第に聞こえなくなっていった。

「これである程度は消えただろう…」

巻き上がっていた砂埃が晴れ、地上を確認すると９割程の妖怪が消滅していた。残っている妖怪の中に一匹だけ他とは纏っている雰囲気が違う妖怪がいた。しかもいたって外傷が無いのを見ると、かなりの強者である。その妖怪は私をジッと睨むように見ていた。

「へぇ…」

私はその妖怪を見て驚きと感心を得た。
その妖怪は周りの異形の形をしたモノとは違い、ちゃんと理性があり、さらに人型であった。容姿は『とある魔術』の広報の…じゃなかった後方のアックアに似ている。つか髪が朱色ではなく茶髪だったらまんまアックアだ。

「こんばんは」
「……」

私はアックア（仮）の前に降り立つ。その途中、襲い掛かってきた妖怪どもは全て空間切断で殺したから、今この場には私とアックア（仮）しかいない。
アックア（仮）は返事をせず、ただただ私を睨んでいるだけだった。

「私は青山刹那。あなたは？」
「……天音迅だ」

私はそう訊くと、今度はちゃんと返してくれた。

「天音　迅、か…。いい名前ね」

そう言うと褒め慣れてなかったのか、迅はそっぽを向いた

「…褒め言葉として受け取っておこう」

「や、褒めたんだけど…」

―ドオォォォン！

爆音と同時に空に一筋の飛行機雲が上がる。
最後の宇宙船が月へと打ち上げられたようだ。これで私の任務は終了した。なので咸卦法・臣を解除する。

「最後の一本が打ち上がったみたいね…」

「……そうだな」

「どうする？私はもう戦う理由がなくなったんだけど、戦うかしら？」

私の目的は全ての宇宙船が月に打ち上がらせるための時間稼ぎと、攻めてくる妖怪の足止め　ｏｒ　殲滅である。先刻、最後の宇宙船が打ち上がったことにより私の役目は終わった。なので妖怪と戦う理由が無くなった。（つっても迅以外はいないが）
だけど、本人が戦いたいというなら戦うが。

「……いや、やめておこう。戦闘をしなくとも結果は目に見えている。
それに外傷が無いように見えるが、今の私は満身創痍だ。満足に戦闘ができない。」

「（やっぱり無傷ではないか。）
そう。それは残念ね。

そんじゃあ、傷が回復するまで私と一緒に旅をしないかしら？」

「旅？」

「そ。旅。
どうかしら？一緒にいかない？」

旅は道憑れ世は情けって言うしね。
私の旅の誘いに、迅は首を捻りどうするかと考え出す。考え出してから数分後、迅は考えがついたのかこくりと頷いた。

「それじゃあ改めまして。私は青山刹那。これからもよろしくね」

「天音迅だ。こちらこそ宜しく頼む…」

私と迅は握手を交わした。

一方通攻（後書き）

後書き

―異能―
『宇宙（そら）』
「異能『空（くう）』の完了型。宇宙に存在する物質を操ることが出来る。」

日本新時代（前書き）

無理矢理は正義である。

明日、予備校で英単語のテストだが、あまり覚えてないので諦めます。

迅を憑れて旅をしてから早百万年の時が過ぎた。その百万年の間、いろんな世界を旅していろんな事をやってきた。修業と云うことで世界神話の神々と戦ったり、ぶらりと行った天界で大天使に捕まって部下の愚痴を聞かされたり、七つ大罪の悪魔達に魔界に呼ばれて宴会したりと、いろいろな事をやってきた。

神々と戦ったり、七つ大罪の悪魔達と戦ったりと、いろんなやつと戦ってきたせいかメキメキと実力が上がってきた。そのためか殆どの異能が完了型になった。それが何の異能なのかはいつか話そう。

それと私の百万年前からの旅仲間である天音迅は、なんとただの妖怪ではなく鬼神であることが判明した。それを知ったのは天界にたまたま来ていた修羅と羅刹の二人が教えてくれたのだ。本人に「そうなのか？」と聞くと「そうだったのか？」と質問を質問で返された。どうやら本人も自分がただの妖怪ではなく鬼神だということを知らなかったようだ。

そんな天音迅は『速度を操る程度の能力』という名の能力を持っている。その能力を使って百万年前の妖怪戦争（私の一方的虐殺だが）で私の分身による攻撃を凌いでいたらしい。

『速度を操る程度の能力』とは、生物や物体・物質のありとあらゆる“速度”を操ることができるらしい。

迅はその能力を上手く使っている。頭の回転を“速く”して攻撃の対処法・手段を一瞬で思考したり、自分自身の体の動きを“速く”して高速で攻撃・移動・回避したり、脳の伝達“速度”・身体の反応“速度”を上げて相手の攻撃を読んでカウンターしたりと多種多様に使っている。勿論自分以外にも仲間や敵にでも使える。

百万年の間、私と一緒に神々や悪魔などと戦ってきたせいか迅は完全に能力をマスターした。今では私の本気の光速の連続攻撃を見切

って、スキあらばカウンターをしてくるぐらいである。

閑話休題。

そうそう、驚いたことに青木ヶ原樹海の奥底に特殊な結界で隠蔽されている『地獄門』があって、その地獄門をくぐり迷宮のような道の奥先にあの『壬生の地』があるのだ。何故それを知っているのかは、五十万年前、伊邪那岐・伊邪那美夫婦に神界に呼ばれた時にたまたま居合わせていた初代“紅の王”と仲良くなり、壬生の地へと招待されたからである。

壬生の地とは、世界中のありとあらゆる医学・呪術を掌握して日本の歴史を影から動かしている神の一族と呼ばれている者達が居る国――だったような気がする。

そこでもいろんな人達と仲良くなったのは余談である。

閑話休題。

さて、そんな私は今“一人”で旅をしていた。何故一人なのかというと、迅が「一人で旅をしてみたい」と言ったのでそれに私は快く了承し、私は東方、迅は西方に行き、別れたのだ。迅は別れる際に『式紙』に契約して別れた。

『式紙』とは、夏目友人帳の『友人帳』を改造したやつだと思ってくれれば助かる。詳しくはいつか話そう。簡単に説明すると、式紙に書かれた契約者の名前を詠めば召喚(あらわれ)てくれる。どんなに離れていてもな。

話しが逸れたが、そんな私は今何故か白い蛇たちに襲撃されている（※スタンド攻撃ではありません）。しかもその白い蛇はただの蛇ではなくミシャグジが眷属する白蛇である。つまり、洩矢神（諏訪子）が此の地に居るってわけだ！（ぇ

そんな白い蛇の攻撃（つーか飛び付き？）を軽くいなしながら前へ

と進んでいく。途中、一匹の白い蛇から「引き返さないと祟る、祟るよ、祟りますよ！」と『祟り』の三段活用と見事なフリを貰ったので堂々と前に進んでいった。そのためか、よりいっそう攻撃が激しくなって、いい加減にウザくなってきたので『大嘘憑き』で此の地のミシャグジと洩矢神の信仰を9割程“無かった”ことにしたら、攻撃がピタリと止んだ。

「さて、邪魔な蛇もいなくなったことだし、のんびりと行きますか♪」

今頃、洩矢神は突然力(しんこう)が減って混乱しているんだろうな♪、と愉しそうに笑いながら刹那は歩を進めていった。

「正直スマンかった！だから信仰を戻して！お願いします！」

絶賛洩矢神土下座中。
そんな洩矢神に私は笑顔で、

「だが断る♪」

と言ってあげた。
そしたら「なん…だと…」と絶望した表情に変わる。私はその表情を見てゾクゾクと何かが込み上がってくる感覚に襲われた。これが愛か！（※違います）

今私は洩矢神を奉っている神社にいる。９割程の信仰を無くされた洩矢神はどれくらい弱くなったのかを見に来たのだ。そしたら、かなり弱っていて私を見た瞬間すぐに土下座をしだして今に至る。

「つーか、何で私に攻撃してきたのかしら？私、あなたに何かしたっけ？私が納得する言い訳を訊かせてもらおうかしら？」

私は笑顔で洩矢神にそう訊ねると、洩矢神はガタガタと震え出した。はて？ドウシテフルエテンノカナ？それにしても、その表情もまた・・・イイわね。やはり愛（ｒｙ

「ねぇ？どうしてかしら？」

「あの、えと、それは・・・」

洩矢神、説明中・・・

「と、言うことですいませんでした！」

そしてまた土下座を・・・いや、土下寝をする。途中から姿を現したミシャグジは土下座をしていた。（蛇が土下座する光景ってシュールだな）

洩矢神が私を襲ったのは、どうやら私を尋常じゃない強さの妖怪と勘違いして、土地を護るために襲ったらしい。

あ～、そういえば妖力とか魔力とか霊力とか気力とか神々と戦って、

そのままだったな。勘違いしてもしかたないか。

「ふむ。勘違いならしかたないな。
あい解った。信仰を“戻して”あげよう」

私は『大嘘憑き』で“無かった”ことを“無かった”ことにして洩矢神とミシャグジの信仰を“戻して”あげて、自分の力を一般並に抑えた。

「お、おお、おおおっ！！！
みなぎってきたァァァアッ！！！！！」

信仰が戻ってきたことにより洩矢神のテンションが“ハイ”になっていた。

「貴様！さっきはよくもやってくれたな！成敗してやるぜヒャッハァー！」

信仰が戻って最高に“ハイ”になった洩矢神は刹那に襲い掛かるが、

「フンッ！」

「メメタァッ！？」

様々な神々と闘ったことがある刹那に勝てるはずもなく、脳天チョップの一撃をくらって地に伏した。

「信仰（ちから）が戻ったからって調子に乗るなよ洩矢神」

私は地に伏している洩矢神の上に座りそう言った

「あー、うー
おかしいな？信仰が戻れば倒せると思ったのに…」

「残念だがそれはないな。生憎、お前以上の強さを持った神々と闘ってきているんでね。お前の強さ程度じゃ、私の闘ってきた神々の中で１００位にも入らない強さだな」

ちなみに1位はクトゥルフです。アイツは強かった。右ストレートが決まっていなかったら負けていた。

「えっ、なにそれこわい」

「あと、伊邪那岐・伊邪那美夫婦はお茶友達です」

「なん：だと…！
てか、いい加減私の上から下りてくれない？」

「だが断る。坐り心地がいいから」

「いや、冗談抜きで本当に下りて下さいお願いします！これ以上座られてると、何かに目覚めそうだから！」

私は無言で洩矢神の背中から立ち上がり、そっと距離を取った。だいたい１０ｍぐらい。

「や、何でそんなに離れるの？！」

「喋るな変態！」

「ひどっ！？」

まあ、なんやかんやで私は洩矢神の神社に泊まることにしたのだった　まる

（え？無理矢理だって？それがどうしたよ？）

諏訪大戦前（前書き）

予備校でなかなか更新できない

夏休みだけは予備校は休ませてもらおうと思っています。生物の授業がある日は行くけどね。

諏訪大戦前

洩矢神を奉ってる寺に住んでから早数千年が経った。その数千年の間、洩矢神を信仰する信者が増え続けてかなりの力をつけてきた洩矢神。また調子に乗って勝負を挑んで来たが、何も出来ずに最初と同じ脳天チョップの一撃をくらって「あうぅん」した。
それと洩矢神は何百年か前に近隣諸国をのみこんで諏訪大国を建立した。あと洩矢神を奉ってる神社がこの数千年の間に何回か改築して、かなり立派になった。

閑話休題。

そうそう、突然話し忘れていたけど私は『神』になっていたよ。だいたい三十万年前ぐらいにオメテオトルにそれを訊かされた時は驚いて開いた口がふさがらなかったね。マジビックリ仰天！
（オメテオトルとは、アステカ神話の創造神。別名オメテクトリまたはオメシワトルと呼ばれている。
その名は『二面性の神』を意味し、対立する二つ（男と女、光と闇、秩序と混沌、静と動、是と非など）を兼ね備えた完全なる存在である。
『身近なるものの神』、『環の中にいる者』、『我らの肉の男神にして女神』など数多くの異名をもち、神の中の神『万物の主』として崇められている。
ケツァルコアトルやテスカトリポカなどの神々を生み出した後、創造をやめ、世界を創造する役目を自身の子供（神）達に譲った。そして天の最上部で、神々と世界と人間が移ろいゆく所を、ただ静かに見守り続けているという。ｂｙ．ｗｉｋｉ教授）

んで、信仰先は何処かと訊ねたら月だった。月では私は月を守護した『闘神』として奉られているらしい。何故に闘神？　あと、月以外にも今まで闘ってきた神やら悪魔やらからも信仰されているらしい。や、なんでさ？

閑話休題（＾ｐ＾）

さて、話しは戻って、なんと今日にあのガンキャノンでお馴染みの大和神（八坂神奈子）が此の国へとやってきます。何故やってくるのかは、土着神（諏訪子）の信仰を奪いに来るそうだ。
そう、あの第一次諏訪大戦である。

「私はあなたと大和神の戦いに手出ししないから、安心して集中しなさい」

勿論、私はその戦いに参戦するつもりだが、大和神には手を出さない。歴史通りに進めたいからね。

「私としては手出しして欲しいんだけど、これは私の問題だからしかたないね。
だけど、大和神が連れる神兵は頼んだよ？私の眷属だけじゃきついからね」

「ああ、頼まれた。助っ人を三人程呼んだからすぐに片付くだろう。来ればの話しだけどね」

「ちなみにその三人って？」

「伊邪那岐と素盞嗚と月夜見だ」

まさかの伊邪那岐親子である。

「うわ～、なにその勝てる気がしない三人組は。敵じゃなくって本当によかったよ…」

私が上げた名前を聞いてドン引く洩矢神。確かにこの三人組が来たら勝てる気しないよね。内の二人は戦闘狂だし、敵に同情しちゃうよ。

…ま、呼んだ本人が何を言うんだって話しだがな。……ん？

「噂をすれば…だな」

「えっ？」

「刹那～、遊びに来たぜ～」

「ただいま参上したり」

「来ましたよ刹那」

突如、虚空に白い扉が現れて、そこから三人の神が出てきた。三人の内二人は男性で一人は女性である。

「いや～、よく来てくれたね三人共！本当に来るとは思わなかったよ！」

「な～に、暇だったから来ってやっただけさ！

それに、最近闘ってないからな。腕が鈍っちまったらいけないしよ！」

クカカカッ！と大声で黒髪黒眼の優男こと伊邪那岐は笑いながら言った

「我もちょうど暇を持て余していたところだ。」

フッ・と静かに黒髪碧眼の素盞嗚は笑った

「私は御礼として来たわ。こんなんじゃ物足りないけどね」

フフフと口元を扇子で隠し、妖艶に黒長髪で黒眼の月夜見は笑った

「まあ、とりあえずありがとな！
あと月夜見、べつに御礼なんていいわよ。そういう運命だったんだから」

「それでもよ。私達、月の民はあなたに救われたのには変わりない。月を代表して言うわ。有り難う」

月夜見はそう言って深々と頭を下げた

「どういたしまして」

「……」

そして終始洩矢神は開いた口がふさがらなかった。

閑話休題。

「さて、それじゃあ、今回の大戦（あそび）について話しをしよう。
今日、二三時間後に大和神＋αが来る。理由は、此の地の神である洩矢神の信仰を奪うためらしい。」

「信仰を奪うって…」

月夜見は呆れ顔になる

「んで、私達が今回やることは、その大和神が連れる＋αをどれだけの数を倒せるかを争う遊戯（あそび）をやろうと思う。」

「そりゃ、おもしろそうだな」

「それだけではなく、一番多く倒したやつは誰か一人に命令できるのだ！」

「！！
」
「――ッ！！」
「！！（ピキーン」

その時、伊邪那岐と素盞嗚に電撃が走る。ただ一人月夜見だけ目が光ったが。

「それはそれは…」
「おもしろそうであるな」
「勝てば刹那と‥‥フフフ」

三人のやる気が最高になったようです。ただ一人だけ、危ない思考

をしているようですが。

「そうそう、話しは変わるけどその＋αを連れる大和神と戦う神が彼女、洩矢神よ。くれぐれも攻撃しないでね」

「えっ、あっ、は、初めまして、此の地の神の洩矢神です。よ、よろしくお願いします！」

有名な神三柱を目の前にして、ガチガチに緊張しながら挨拶をする洩矢神。
はて？何故そんなに緊張しているなのだろうか？と私は首を傾げた。

「おう！よろしくな！」
「宜しく」
「フフフ・・・宜しくね。
それと刹那、緊張するのが普通よ。創造神を目の前にしても緊張しないで普通に接してくるのはあなたぐらいよ」

伊邪那岐、素盞嗚、月夜見は挨拶を返して、月夜見は刹那の疑問に突っ込んだ。
刹那はあぁとポンッて手を叩いて納得した表情を浮かべた。

時間は吹き飛ばして三時間後、洩矢神＋最強神々と大和神＋αは対峙をしていた。大和神は洩矢神が連れている神四柱を見て冷汗を垂らしまくっていた。大和神だけではなく、大和神が連れる＋αも（。д。）↑こんな表情を浮かべていた。そんな大和神＋αを見ていた洩矢神は同情の視線を送った。

それもそうなるであろう。

一人は日本で最初の夫婦神であり、『国産み』や『神産み』で有名な創造神である伊邪那岐命。

一人はあるときは悪玉と呼ばれて、またあるときは善玉と呼ばれた、八岐大蛇を退治したので有名な三貴神の一人である素盞嗚尊。

一人は夜を統べる者、マイナーな神「ちょっ！」であり、月の都の最高権力者である月夜見尊。

一人は世界中の神々や悪魔等と闘い勝ち続け不敗、人間から知らず知らずに神になっていた日本最古の旧神で“最凶で最狂の最恐であり最強である闘神”青山刹那。

……うん、勝てる気がしない。さらにその四柱は殺る気満々である。もっと勝てる気がしない。

「それじゃあ、第一回！『大和神が連れる＋αを何体倒せるか？』を始めたいと思います！！！」

「「「いえーーーい！！！！！」」」

三柱は盛り上がっている

「ルールは簡単！＋αを倒すだけです！

尚、一番多く倒した人は誰か一人に命令することができますので頑張って下さい！」

「「「は～い！」」」

「それじゃあ、開始の合図は洩矢神が大和神に火ぶたを切り落としてからです！いいですね？」

「「「いいですよ～！」」」

それにしてもこの神四柱はノリノリである。

「（何であっちに、創造神と三貴神の二柱がいるんだい！？それにその三柱と仲よさ気のあの神も尋常じゃない程の神力を感じるし、、、これ勝てないんじゃね？
いや、まてよ？実はあれはミシャグジの呪術で創った幻術であって私たちはそれに惑わされているのに違いない！）」

と、大和神は希望を持ったのだが…

「さて、久しぶりにお兄さん頑張ろうかな！」

伊邪那岐は、妻の伊邪那美と国を産み出した時に使われたと云われる矛を戦闘用に改良した“天地之逆鉾”を手に取り、

「せいぜい楽しませてもらおう」

素盞嗚尊は八岐大蛇を退治した時に尻尾から出てきたと云われる“天叢雲剣”を掴み、

「フフフ…」

月夜見は姉である天照大御神と造った白と黒の扇子“黒天白夜”を取り出して、それぞれ構えを取った。
その一つ一つの神器からあふれでる神力はとてつもなく、大和神の希望は打ち砕かれた。

「（モノホンですね、わかりたくもありませんでした）」

「空が青いな～」
『そうだねぇ～』

大和神は心の中でｏｒｚになり、＋α（神官）たちは現実逃避をしていた

「これはひどいｗｗｗ」

その三柱を連れてきた元凶である刹那は大和神＋αたちを見て笑っていたのであった。

神々の遊戯（あそび）（前書き）

予備校で先生の目を盗みながらポケモン書いてた。

最近やってないから、カオスになった。

神々の遊戯（あそび）

「無明神風流奥義『黄龍』！」
「『天変地異』！」
「『臥龍点睛』！」
「『天墜“照”』！」

『イィィヤァァァァーーー！！！！！？！』

黄金の龍が、無数の石の大槍が、数千の斬戟が、大空を隠す程の強烈な光が、＋α（神官）達に襲い掛かる。＋α達は戦闘どころではなく逃げるのに必死だった。それもそのはずだ。たかが神官ごときが最上位の神と戦うなんて無謀にも程がある。
だが悲しかな。此の領域（エリア）からは逃げることはできない。何故なら、刹那が結界“鳥籠”を張ったからである。これを壊せるのは最上級の神レベルではなければ壊せない。

『オレ、この戦いが終わったら天界に帰って彼女にプロポーズして故郷で式を挙げるんだ』
『あかん！それ死亡フラグや！』
『オレさ、今日、娘の誕生日なんだ。』
『アカン！それも死亡フラグや！』
『オレも実は…』
『いい加減にしなはれや！もういやだ！こいつらと一緒にいられるか！オレは先に帰る！』
『『『アカン！それ、死亡フラグや！』』』
『はっ！』

なんか、あそこにいるやつら仲が良いな。とりあえず、親切な私は

その（死亡）フラグ回収させてあげよう。

「無明神風流奥義『朱雀×５』！」

『アッーー！！！！！』

五匹の朱雀を象った闘気が四人に襲い掛かり、地上へと落下ちていった。

一応、言っとくけど最上級の神は殺傷・非殺傷を自由に設定できるから＋αたちは殺してはいない……と思う。

「私の野望のために堕ちなさい！『天墜〝落月〟』」

『イエ〝ア〟ァァァァァァ！！！！！』

なんか何故か解らんけど月夜見が異常に張り切っている。そして先刻から悪寒がひどい。風邪でも引いたか？

「ほらほら～！最近ダラシネェ～ナ！」

伊邪那岐は何処ぞの兄貴よろすくに槍を振るい、＋αを次々と蹴散らしていく。

「『零戦・鎚軌』！」

素盞嗚は神速（こうそく）の居合い抜きを繰り出して、何十単位で＋α達を落としていた。

「みんな張り切ってるね～。私も頑張らないとね！」

私は愛刀の『雪月花』を握りしめて、やけくそ気味に突っ込んで来てる＋α達に向かって究極奥義（非殺傷）を放った。

「無明神風流終極奥義『神龍』！」

神力と闘気で創られた神龍はやけくそ気味に突っ込んで来た＋αと周囲の＋αも巻き込み、地上へと落としていった。その中に伊邪那岐がいたような気がしたがきのせいだろう。

無明神風流終極奥義“神龍”とは、無明神風流が完璧に完了して初めてできる『技』である。今のところできるのは青山刹那ただ一人である。

（他にも無明歳形流終極奥義“星龍”があるが、それはまた後程）

「てめぇこら刹那！オレも巻き込んでんじゃねぇよ！」

どうやらきのせいじゃなかったようだ。少しボロボロスの伊邪那岐が怒りながらやってきた。

「すん←ませーん→
反省はしている、だが後悔はしていない。むしろ清々しい気分である」

「てめぇこの野郎（＾∀＾＃）」

笑顔で切れるという芸達者な伊邪那岐を無視して行こうとしたが、ふと面白いもんが頭を過ぎったので伊邪那岐にそれを提案してみた。

「そんなことはさておき、伊邪那岐よ、面白いことを考えついたんだがやるか？」

「さ・て・お・く・な！
・・・で？面白いことってなんなんだ？」

「ちょっと耳貸して」

私は思いついたことを伊邪那岐に話した。

「・・・そいつは面白いじゃねぇか！だけど倒した数は半々に分けろな？」

「当たり前だ。じゃあ、やるか？」

「おう！」

私と伊邪那岐は互いに背中をあずけて、互いに技を放った

「幾千万雷！」
「大地の憤怒！」
「「混合奥義！『天地の逆鱗』！！！」」

空は黒い雲に覆われて幾千幾万の神鳴りが降り、大地からは地面を隆起して噴火する。
多くの＋αを巻き込み、地上に墜としていった。その近くに素盞嗚と月夜見がいたような気がしたきのせいだろう。

「おぉ～、大量に墜ちていったな。てか近くに素盞嗚と月夜見と気のせいか？まあ、どうでもいいがな！」

あの程度じゃ死なんだろうし！と伊邪那岐は笑った

「――――」
「――――」
ん？あっちも私たちみたいに混合奥義をやるみたいね。・・・あれ？なんか矛先がこちらに向いているような・・・
「「混合奥義！『宵闇の蝟』！！！」」
黒い疾風が斬撃となり、＋αと私たちに襲い掛かってくる。・・・って、ちょっ！
「なんか、こっちに向かってない！？」
「向かっているな！やっぱり、先刻の攻撃が当たっていたらしいな！」
ＨＡＨＡＨＡ！と笑う伊邪那岐
「いや、何笑ってんだよ！
・・・って言ったが、防げるからべつにどうでもいいんだけどね」
異能の『影』の完了型である『闇』を使って、自身を闇で包み攻撃を防いだ。伊邪那岐は槍を回転させて防いでいた。

まあ、なんやかんやで第一次諏訪大戦が終わり、洩矢神が負けたことにより勝敗が決した。
そして、第一回『大和神が連れる＋αを何体倒せるか？』の優勝者はギリギリの差で月夜見に決定したのであった。
なんか私を獲物を狙う眼で見ていたんだが、私はどうなるのだろうか？十中八九、私を指名してくると思うし…。

さて、再旅に行こう（前書き）

もじけぇです。あと駄文。

今週のジャンプ見たんだけど球磨川さんマジかっこいいね。あと今日発売されてるマガジンも見たんだけど、やっぱり造物主は消滅されていなかったね。ネタバレかな?どうでもいいけど。

先の話しだけど“ネギま!”のキャラを幻想入りさせる予定でし。誰かはいいませんがね。

さて、再旅に行こう

さて、みんなの鬼井さんの青山刹那だよ！キラッ☆彡
……うん、気持ち悪かったな。反省はしている、だが後悔はしている。
第一次諏訪大戦の後、私は月夜見の命令で男だということを“虚構（なかったこと）”にされて女になり、メイド服を着せられて、帰るまで一日中奉仕をさせられた。てか、何故メイド服があるし？
あと、やたらめったに月夜見に身体を触られまくった。抱き着かれたりとか胸とか尻とかも撫でられたりとか、お前は変態オヤジかよ！とツッコミたくなったが我慢した。それがどんどんエスカレートしていって、最終的には小部屋に連れていかれて、強力な結界＋防音結界が一瞬で張られて、月夜見に性的な意味で襲われそうになったが、襲い返したのはいい思い出だ。とても美味しかったです。（襲い返した時に月夜見はM（受け）だということが判明したのは余談である。）
　それと洩矢神の信仰はあまり落ちていなかったというのも、ミシャグジ信仰がそう簡単に他に移るはずもなく洩矢神の力は健全である。まあ、移ったらミシャグジに祟られると思っているのだろうな。あと洩矢神は名が変わり、守矢神となった。大戦で出来た諏訪湖から字を少し弄って“諏訪子”が足されて、『洩矢神』改めて『洩矢諏訪子』となった。

閑話休題。

諏訪大戦から、だいたい８００年ぐらいが経った。そろそろ旅に出ようかなと思っている。

「つーことで再び旅してくるわ」

「何が『つーわけ』でかはわからないけど、いってらっしゃい」

「んじゃあいってくるわ。神奈子によろしく言っといてノシ」

「分かった。またね～ノシ」

私は諏訪子に別れを告げて、再び旅に出た。そろそろ、鳴くよ鶯でおなじみの平安京ができてると思うしな。久しぶりにあいつの息子にでも会いに行くか。確か京の都に住んでいるって言ってたしな。あいつ自身も。

「着いた」

途中、異形の形をした犬の妖怪や猿の妖怪、一つ目の鬼や巨大な蜘蛛に襲われたりしたが、無事に京の都に着いた。襲ってきた妖怪たちはお亡くなりになりました。

話しは脱線するけど鬼で思い出したんだが、迅はなんと鬼の四天王になってたらしい。今は弟子の鬼童丸に場を交代したらしいが。

「さて、入るか」

私は勘違いされると困るので『大嘘憑き』で妖力を虚構にして、平安京に入った。

あいつの霊力を辿って行けばあいつの家へと着くだろう。酒でも持ってってやるか。

心友に会いに（前書き）

何か少し変だと思いますが気にしないで下さい。駄文だからしかたないとです。

心友に会いに

「よお、晴明！」

「おお！これは刹那殿ではないか！」

私はあいつの霊力を辿り、あいつの息子であり、最強の陰陽術者である“安倍晴明”の家に着いた。容姿は『ぬら孫』の安倍晴明と同じ容姿である。つかそのまんまである。

「久しぶりではないか！元気にしていたか？」

「ああ。元気があり余るくらいな！あとこれ、手土産な」

「おわっ！」

私は手に持っていた酒瓶を晴明に投げ渡した。放物線を描き飛んでくる酒瓶を晴明は危なっかしくキャッチした。

「晴明様、客人ですかって・・・刹那様でしたか」

屋敷の方から恐持ての面した男性――鬼童丸（容姿はぬら孫の）が私の顔を見るなり嫌そうな顔をした。ちなみに鬼童丸は晴明の式である。

「なんだその顔は？迅に言って『修業コース：獄』をやらせるぞ？」

「すいませんでした！」

そう私が言うと鬼童丸は直ぐさま土下座をして謝った。やっぱり慣れていても『修業コース‥獄』はきついんだな。
ちなみに迅というのは、私の式紙であり鬼童丸の師匠でもある。本名は天音　迅。鬼童丸と同じ鬼で、元・鬼の四天王の最後の一人でもある。今は弟子である鬼童丸に譲っている。

「ハハハ。刹那殿よ、あまり鬼童丸をイジメないで上げて下さい」

私と鬼童丸の光景に苦笑いをする晴明

「ただいま戻りました‥‥って、なんだこの光景は?」

買い物から帰ってきた晴明の式の茨木童子は目の前の光景に困惑していた。扉を開けたらあの鬼童丸が女性（?）に土下座をしていたからだ。混乱している茨木童子に気付いた女性（?）は茨木童子に声をかけた。

「お邪魔しているよ、茨木童子」

「‥‥なんだ、あんたか刹那」

茨木童子は鬼童丸がしたような顔をした

「‥‥お前は『修業コース‥天』をやらせ――」

「正直すまんかった!」

茨木童子も土下座をした。買い物袋を横に置いて。

一応説明すると、『修業コース‥獄』というのは三日三晩（トイレ

休憩あり）迅と本気（と言っても修業する奴の二回りの強さに調整している。しかし、手加減はしない）で闘い、さらに三日後になると刹那も闘いに加わる地獄の修業コースである。若き頃の鬼童丸と茨木童子は何回も二日目の朝で力尽きた。今もたまにやるが結構きついらしく、三日三晩やった後は全身筋肉痛で一日は動けなくなるらしい。『修業コース：天』というのは、『修業コース：獄』より辛く、自動操縦状態の刹那に一撃を与えるか刹那が飽きるまで終わらない。勿論、反撃もされるのでそれに注意していないと一発くらってしまう。反撃の一発をくらうと『修業コース：獄』が追加されるというペナルティが発動する。反撃はいつ起きるかはわからないので精神を極限まで研ぎ澄まさないと、地獄を見ることになる。茨木童子はその修業コースを一度だけやったことがあり、楽だなと考えていたが地獄を見る程つらかった。真っ正面で攻撃したが躱され、不意を狙ってみたが躱され、死角を狙っても躱され、スキをついても躱され、逆にスキを突かれて反撃の一発をくらい、修業コース：獄が追加されて茨木童子はｏｒｚになった過去が未だトラウマに成りかけて：：いやなっているのである。

それをやらせられるのはもう後免な茨木童子は鬼童丸同様直ぐさま土下座したのであった。プライド？何それ食えるの？

「刹那殿。茨木童子もイジメないで上げて下さい」

ハハハと苦笑う晴明。

「しょうがないな～。晴明がそういうなら今回は許してやろう。だけど、今度またそんな顔をしたら問答無用に『修業コース：垠』をやらせるよ？」

「「肝に銘じておきます！それだけは勘弁して下さい！」」

鬼童丸と茨木童子はきれいにハモリながら頭を何度も下げた。
ちなみに『修業コース‥垠』とは、『修業コース‥天』と『修業コース‥獄』よりも辛く、私の式紙（というよりかは友人）の五人と連続で闘ってもらう事だ。その五人というのは壬生に居る太四老（吹雪、ひしぎ、四方堂、村正）と紅の王（壬生京一郎）である。途中で力尽きても私が（無理矢理）回復させて闘かわせて、また力尽きても回復させての繰り返しの休憩無しの地獄の修業コースである。一人時間は３０分。もちろんガチである。順番は吹雪→ひしぎ→四方堂→村正→京一郎である。その中で村正と京一郎は問答無用にたたきのめしてくるので鬼童丸と茨木童子は涙目だったのはいい思い出だ。
興味本意で迅もこの修業コースやった事あって、難無くクリアしてたよ。…え、私？私も一応やったことあるけど、我ながらあれはきついね。てか、私の場合だと五人全員が本気（ガチ）の本気（マジ）でかかってくるからきついのなんの。太四老の四人は最初っから紅の眼で来るし、京一郎も真紅の瞳全開で来るから体力的につらいよ。…まあ、勝てるけどね。

「ならよろしい！あ、そうそう、晴明や羽衣狐は元気にしてるか？」

「ああ、毎日父上とイチャイチャしているよ…」

私は晴明にそう訊ねると、晴明は疲れた表情で返した。
羽衣狐とは、晴明を育て、陰陽術を教えた八尾の狐である。そしてその正体は晴明の父である保名の妻の葛の葉（狐）でもある。この世界の羽衣狐ははっきり言って美人である。それも十人が十人振り返る程の美しさを際立たせている。それはもう、羽衣狐を見た後にかぐや姫を見て、かぐや姫を鼻で笑えてしまうぐらいに羽衣狐は綺麗なのだ。そして保名とはほぼ毎日イチャラブっている。それはもう羽衣狐を慕っている京妖怪が砂糖を吐くぐらいにだ。（実際に砂

糖を吐いた妖怪もいた)

「ハハハ。相変わらずだな、羽衣狐は」

「はぁ〜…」

苦笑う私と溜息をつく晴明。そんな二人のもとに噂の夫婦がやってきた。

「おやおや、久しぶりじゃないか刹那。元気じゃったか?」

「おっ!これはこれは刹那殿ではないか!久しぶりだな!」

保名と羽衣狐が腕を組みながらやってきた。相変わらずイチャラブしいるな。見ているだけで砂糖を吐きそうだよ。

「刹那お姉様〜!」

「っと!」

そう私が思っていると一人の少女が私に飛び込んできた。私はそれを優しく受け止めて、抱き抱えた。少女の名前は狂骨。好奇心旺盛のお年頃の羽衣狐の家来だ。

何故かは知らないが彼女は私に懐いている。それは嬉しいかぎりなんだが、呼び方が“刹那お姉様”って言うのがね。なんか…解せぬ。

……あっ、茨木童子お前今笑いそうになったな?喜べ、お前には『修業コース:垠』をやらせてやろう。

ニヤリと笑みを浮かべる私を見ていた茨木童子はゾクゾクと身震い

する。それを横目で見ていた鬼童丸はポンッと茨木童子の肩に手を置いて首を横に振って「諦めろ」と言った。最初理解出来なかった茨木童子だったが、私の笑みの意味が解り顔を青褪めて「冗談だろ？」と言ってそうな視線を向けてきたので私は笑顔で首を“横”に振って肯定した。そして茨木童子はｏｒｚと化した。そんな茨木童子を鬼童丸は同情の視線を送っていた。

「久しぶりだね狂骨。それと私はこれでも“男”だから、お姉様っていうのはやめてくれないか？」

「えっ？刹那お姉様は、刹那お姉様ですよ？」

何がいけないのですか？と、コテンと首を傾げる狂骨。私はそれを可愛いと思うと同時に『やっぱり無理か…』と心の中で溜息をついて狂骨の頭を撫でた。狂骨は猫のように目を細めて気持ち良さそうにしている。

「せいやん、邪魔するぜぃ！
おっ！そこにいるのはせつやんじゃないか！久しぶりだにゃ～」

私が狂骨に癒されているとイケメン君が酒瓶を片手に晴明を訪ねてきた。そしてそのイケメン君は私に気付くと手を振ってきた。

「これはこれは道満殿。お元気そうでなによりです」

「はっはっは！せいやん、そんな畏まり口調じゃなくてべつにいいぜよ！
それとこれ、手土産だぜぃ」

笑いながら道満は晴明の背中をバンバンと叩き、手に持っていた酒

瓶を渡した。
独特な喋り方（つーか土御門口調）をする彼の名前は蘆屋道満。晴明と互角の陰陽術の腕前を持っている。晴明との関係は好敵手であると同時に親友でもある。

「おお！これは銘酒の『千年殺し』じゃないか！よく手に入れたな道満殿よ！」

晴明は道満から貰った酒の銘柄を見て興奮していた。つか『千年殺し』って、どこの片目忍者の必殺技かよ…。

「行きつけの酒屋に行ったら偶然に見つけてな！最後の一本らしいぜぃ」

「なんと！本当に頂いていいのですか…？」

「気にするなせいやん！日頃の御礼だにゃ～」

そう言って道満は晴明の背中を叩きながら笑った。
相変わらずだな道満は。私が狂骨を撫でながらそう思ってると不意に背後から誰かに抱き着かれた。背中に柔らかい双子山の感触がするからにして女性か。それに黒い羽が舞っているってことは…

「お前も久しぶりだな、夜雀」

「久しぶりです刹那様…」

私に抱き着いている女性の名前は『夜雀』。顔と頭を狐文字で書かれた経文で覆い、髪をそれで束ねている鳥妖怪だ。寡黙であまり喋らないが、私の時にだけ少し饒舌である。それと彼女も私に懐いて

いる。あと私の式紙でもある。

話しは少し変わるが、私が使う式紙は式神とは少し異なっている。まず、式神と云うのは本来陰陽師が使役する鬼神のことで、人心から起こる悪行や善行を見定める役を務めるもの。式の神ともいい、文献によっては式鬼（しき）、式鬼神ともいう。簡単に云えば使い走りみたいなもんだ。

一方の式紙は、簡単に云えば夏目友人帳に出てくる『友人帳』を改造したやつである。特殊な紙に式紙にしたい妖怪・神霊の名前を“本人”に書かせて契約完了である。あとはその式紙に書かれてる名前を唱えるだけで式紙となっていつでも何処でも召喚出来るのだ。ただ、都合が悪い時は唱えても召喚しない事がある。基本、式神みたいに強制的…みたいな感じではなく、自由奔放的なので契約者と一緒に居ることは少ない。なので刹那の式紙である天音迅と太四老と紅の王は刹那の周りにいなく、そして迅は自由奔放に旅をしている。（呼ばれれば文句も言わずに直ぐに駆け付け（しょうかんす）る）

閑話休題。

さて、話しは戻るが突然保名が「刹那殿が来た事だし、今夜は宴会するぜヒャッハァー！」っと言い出し、周りはそれに賛同して数時間後に宴会が始まった。何故そうなったし？……まあ好きだからいいけど。

宴会。告白（前書き）

もじけいです。それと支離滅裂。

Ｒ１５表現あるかも知れません。というよりかはＲ１５の定義が解りませんから、Ｒ１５なのかは疑問です。

そして駄文。

宴会。告白

そして時間は夜１０時ぐらいになり、大宴会場にはたくさんの人間と京妖怪が集まり、宴会が始まった。（つっても、人間１：妖怪９の割合だがな）

「飲ま呑まＹｅｅｅｅａｈ！！！！！」

「のま飲ま呑まＹｅｅｅｅａｈ！！！！！」

晴明と道満が肩を組んで愉快に歌いながら酒を呑んでいる。つか何故知ってるしその歌…。

・・・・・

まあ、なんやかんやで宴会が始まってから二時間が経った。大量の酒瓶や酒樽が散乱していて大半の妖怪が酔い潰れていた。晴明と道満も仲良く肩を組みながら酔い潰れていて、起きているのは私と保名と羽衣狐と鬼童丸と茨木童子と夜雀だけである。狂骨は私の膝の上で眠っている。

「刹那様…」

「ん？なんだ……ンッ！？」

夜雀に呼ばれたので振り向くと夜雀の顔が目の前にあり、唇を塞がれた。

「んっ……」

唇を塞いだだけではなく舌も入れてきましたよ、えぇ。そのまま口の中を舐め回される。

「…ぅん……」

そして夜雀は私の舌と舌を絡ませ合い弄ぶ。夜雀は思う存分堪能した後、私から唇を離した。

夜雀が酔うとキス魔（私限定で）になる。最初は触れるだけのキスだったが、酔う度にキスのレベルが上がっていって、最近では舌も入れるようになってきた。舌を入れた時に私が何もしないままだと短時間（１０分ぐらい）で済むが、私がそれに応えて舌を絡ませ合うと一時間くらいは唇から離れないのだ。

「夜雀、お前酔ってるな…」

「んっ…」

夜雀は少し空いてる膝の上に頭を預けて、スリスリと膝に頭を擦り付ける。そんな夜雀の頭を撫でてやると、気持ち良さそうに目を細める。しばらく撫でていると、寝息を立て始めた。どうやら寝てしまったようだ。

ふと周りを見てみると鬼童丸と茨木童子は柱に寄り掛かり眠っていて、羽衣狐はどこかに行っていていなく、保名だけが残っていた。

「なあ、刹那よ…」

「なんだ?保名」

突然雰囲気が変わった保名に困惑したが、気を取り直して聞き返す

「オレはそろそろ、妻と共に雲隠れをしようと思っている」

保名は杯に酒を注ぎ、呑む

「……どうしてだ？」

私は訊き返す

「我（オレ）は不老であり長寿だ。故郷である壬生の地を離れて此処に住んでからもう五十年以上の月日が経っている。五十年も時が過ぎているのに、容姿が老いていなく若いままだとそろそろ不審がるだろう。『若造りの術』をやって若くしていると通しているが、そろそろ限界であろう。いや、これでも持った方か？」

「……」

そう。安倍保名は“真”の壬生一族出身であり、不老長寿の秘薬を造り出した者の一人でもあるのだ。葛の葉（羽衣狐）は、実を云うと初代・先読みの巫女であった。二人はひょんなことから出逢い、意気投合をして付き合い、付き合い始めてから数年後にめでたく結婚した。結婚してから数年後に子（後の晴明）を産み、壬生の地を離れて倖せに暮らしていたのだ。

「そのことは晴明には？」

「言ってはないよ。言うのは刹那が初めてさ」

クイッ、と保名は杯を傾ける

「そうか。……なら、羽衣狐には？」

「妻には話しはつけてあるよ。」

「京の都を離れるにして、住むツテはあるのか？」

「ああ、そのことなら心配ならんよ。『雲隠れ』に適任する場所があるだろう？青木ヶ原樹海の奥地に。」

「壬生の地か…」

確かに壬生なら最適だな。壬生の地の入口門は特殊な鍵を持っていなければ結界に阻まれるしな。もし鍵無しで入れたとしても、迷宮で迷ってアウトだろうな。もしくはＤｒ．ホワイトに掴まって人体実験にされるかだな。

「そうだ。あそこなら我（オレ）たち夫婦を受け入れてくれるだろう。それに家が健全であればそこに住める」

「確かにな。それでいつ此処を出るんだ？」

「明朝だ」

「明朝！？随分と早いな…」

「ああ。善は急げってな」

「善はって…。

てか、本当に晴明に言わなくていいのか？」

「ああ、大丈夫だろう。晴明はもう大人だ。我(オレ)たちがいなくとも暮らしていける。それに晴明には我(オレ)たちの全てを叩き込んでやったから、心配ないだろう」

保名はそう自信満々に言った

「そんな問題か？」

「そんな問題さ」

そんな問題だった。

「はあ…、まあいいや。
ところで、羽衣狐は今何処に？」

私は先刻から思ってたことを保名に訊ねた

「妻なら仕度をしているよ。なにぶん、妻に話したのは昨日だったんでね。」

ＨＡＨＡＨＡと笑う保名。いや、そういうことは早めに話せよ保名。昨日ってお前な…。

「そうそう妻から刹那に伝言があるから云うぞ？『狂骨を頼む』だそうだ。」

『狂骨を頼む』って…まあしかたないか。狂骨は羽衣狐の忠誠心が高いからな。お姉様とも呼んでいたぐらいだし。突然、前触れも無く羽衣狐がいなくなったら取り乱すだろうと思うしな。

「ん。解った。」

「ああ。我(オレ)からも頼んむよ。刹那は狂骨に妻の次に慕われているからね。刹那が妻の代わりに彼女の側に居てくれたら落ち着いてくれるだろう」

確かに“刹那お姉様”と呼ばれるぐらいだからそうなんだろうな。

「そうかもね。
そんじゃ、私はそろそろ眠るわ。明日、見送りとか必要かしら?」

私はふぁ～と欠伸をして、壁に背をあずける

「気持ちだけで充分さ」

「そうか。そんじゃお休み」

「ああ、お休み」

そして私は眠りについたのであった。

後日。保名と羽衣狐が消えたことに羽衣狐の家来達は慌てふためいていたが私が説明して落ち着かせた。その中でやはり狂骨が一番取り乱していたが、私が一緒にいると言ったら落ち着いた。
それと晴明は薄々感づいていたらしく、取り乱していなかった。

鬼子母神（前書き）

二週間に1，2個は更新しようと思います。

今回は鬼さんとバトルです。駄文ですが、どぞ。

鬼子母神

保名と羽衣狐が壬生に雲隠れしてから二週間が経った、ある日…。
やあ、諸君。私は今、十人が十人顔を背けるほど私は不機嫌である。
それは何故か？簡単な話しだ。人がせっかく気持ち良く寝ていたら、帝から『京の都に攻めてくる鬼の大群を退治しにいってくれ』と命令が来たんだ。私はそれを無視して二度寝をしようとしたが、晴明がやってきて断念した。どうやら晴明も帝から命令が来たらしい。
「鬼ぐらいなら晴明だけで十分じゃね？」と言って私は晴明だけを行かせようとしたが、それができなかった。どうやら鬼童丸と茨木童子は鬼側についたらしい。まあしかたないよな、産みの親だし。
てか式神がいなくても晴明は強いから大丈夫じゃね？保名と羽衣狐が全てを叩き込んだって言ってたから、実際に土蜘蛛を『滅』って唱えただけで倒したし。
だが、鬼童丸からの伝言で『私と晴明の二人のどちらかでも来なかったら都に攻める』と言伝が来て、私はいかなくてはならない状況になってしまったのだ。これだから鬼は…。せっかく人が久しぶりに気持ち良く寝ていたのに……瞬殺して終わらして帰ろう。いや、そん時には眠気が覚めているな。うわ、むかつく。なので私は不機嫌なのである。

「とりあえず、散々痛めつけてから精神を崩壊させるまで追い詰めて、二度と勝負を挑ませないように調教してやる」

「鬼に逃げて！超逃げて！」

隣りで晴明が何か言ってるが無視だ。しばらくそんなことを考えながら歩いていると指定の場所に着いた。無駄に鬼がめっちゃいるな。
あ、迅がいた。

「よくぞ逃げずに来たな。感謝するぞ、陰陽師殿」

一歩、私たちの前に鬼の親分であろう鬼子母神が出てきて愉快そうに笑みを浮かべて言ってきた。

『解析』を使い強さを測る。だいたい、『迅＜＜＜超えられない壁＜＜＜鬼子母神＜＜鬼童丸』くらいか。まあ天魔よりかは強いか？

「とりあえず、御託はいいからさっさとかかって来いよ鬼っ子。二度と私の眠りを妨げないように調教してやるからさ」

刹那の一言に殺気立つ鬼たち。刹那はその鬼たち以上の殺気を放つが鬼たちは気付かない。否、気付けないのである。一部を除いては。鬼童丸と茨木童子は刹那の尋常じゃない殺気に“気付いて”刹那が今不機嫌状態だと解ると「死んだんじゃね？これ？」みたいな顔して明後日の方を見ていた。迅も刹那を見て不機嫌だと気付いていたが我関せずと柳のように流していた。微量の冷や汗をかきながら。

「あはっはっはっ！威勢がいいじゃないか“娘っ子”！」

「・・・（ピクッ」

そんな殺気を気付いているのかいないのか、鬼子母神は刹那の威勢に大笑いしていた。人間もまだ捨てたもんじゃないと。これならいい勝負になりそうだ。と考えて。

しかし、打って変わって鬼童丸と茨木童子の二人は無性に晴明の元へと帰りたくなった。それは鬼子母神の最後の一言が原因である。とても不機嫌な刹那にやってはいけないことが一つあった。それは『女性』と間違えることである。普段の刹那だったら、女性に間違われても諦めているのか半笑いで男性だと訂正するが、不機嫌な刹

那の場合は女性と間違えると人間だった場合は威圧感ある黒い笑みで脅す（ていせい）するだけで済むが、相手が人外（妖怪など）だった場合は十人が十人振り返る綺麗な笑顔を浮かべながら殺して“虚構（なお）して”殺して“虚構（なお）して”の繰り返して精神がおかしくなっても“虚構（なお）して”を繰り返し、気が済むと悲鳴を上げさずに一瞬として塵にしてしまうのだ。まあそれは昔の話しで今は昔よりかはよくなったものの、笑顔でやるのは変わりない。茨木童子は一度、不機嫌だと知らず刹那に酔った勢いで『刹那って本当に女みたいだよな～』と言ったことがある。その瞬間、殴り飛ばされて土の中に螺子込まれて犬神家みたいになったのはいまでもトラウマになっている。たまたまいた迅が止めていなかったら…。

「…あはっ☆
高速詠唱『滅びゆくｓ「落ち着け、刹那」おぉふっ！痛いだろう迅…」

先手必殺で『滅びゆく世界』をやろうとしたら、さっきまであっちにいた迅に脳天チョップされてできなかった。迅を睨むと呆れ顔をしていて、頭に手を乗せて撫でてきた。

「とりあえず、落ち着け刹那。私たちを殺す気か？」

『滅びゆく世界』とは、刹那の半径１００Ｋｍに存在する全てのモノの生気を奪い尽くして無に還す技である。生物だろうが物体だろうがそこに存在しているのなら構わずに奪う凶悪な技である。

「安心しろ、迅。死んでも“虚構”にしてやるからさ♪
それと頭に手を乗せるな、私はお前より年上だぞ？」

私は笑顔で返して、頭に乗せてる迅の手を払った。

「それでもだ。
それとあの態度からして葵はお前の“殺気”に“気付けていない”だろう。その時点で既に勝負は着いている。
葵ぐらいなら集中していれば“気付けている”はずなのにな。強さ故の傲慢か。」

葵…たぶんあの鬼子母神の名前だろう。それにやはり私の“殺気”には“気付けていなかった”か…。興冷めだな。
もし気付いていたなら、あんな態度は取っていないさ。自慢じゃないが、私の殺気は羅刹と修羅が土下座して謝るほど凶力だからね。
何で土下座して謝るかは知らんけど。

「そうか…。興冷めだな。
少し落ち着いたよ、ありがとな迅」

不機嫌には変わりないけどね

「それはよかった。では私は戻るとしよう」

そういうと迅は姿を消した。瞬速であっちに戻ったんだろうな。迅が戻ったところを見ると鬼童丸と茨木童子が迅にめっさ感謝していた。どうやらあの二人は私の“殺気”に“気付けてた”みたいだな。
まあ、いっしょに修業してれば嫌でもそうなるか。

「…随分と迅と仲が良さそうだったな娘っ子」

鬼子母神はおもしろくなさそうな目でこちらを見ている

「当たり前よ。永年付き添った相棒だからね」

「…そうか。まあそれは今はいいな。
そういえば、自己紹介はまだだったわね。私の名前は無果実葵(いちじくあおい)よ。」

「それはどうも。私は青山刹那よ。べつに宜しくしなくていいわ」

「私は安倍晴明。しがない陰陽師だ」

「刹那と晴明ね、解ったわ。」

「さて、自己紹介も終わったことだし、さっさと始めようじゃないか。さっさと帰って寝たい…」

あ～、早く帰って寝たい。夜雀の翼をもふもふしながら寝たい。

「まあまあ、落ち着きなさい刹那よ。ただ勝負してもおもしろくないから、一つここは賭けをしようじゃないか」

そう言って、葵はにやりと笑った

「今から私が指名した四人の鬼を倒したらあなたたちの勝ち、私たちは二度と都を襲わないことを誓うわ。でも、もし倒せなかったら私たちの勝ち。その時は都を襲わせてもらうわ。勝負は勝ち抜き戦。どちらかが“死ぬ”か“降参する”かで終わり。どう?やるかしら?」

べつに全員かかって来てもいいんだがな。まあ、早めに終わらせることが出来るんだったらそれに乗るか。だいたいの出てくる鬼らは解るしね。

「べつにいいわよ。いいわよね、晴明？」

「ああ。私もその条件で構わないよ。どうせ出番はないだろうしな」

晴明はちらりと私を見る。さすが晴明、解っているじゃない

「ほう。随分と余裕だな陰陽師よ…。

まあいいだろう。せいぜい私たちを愉しませてくれ！」

そう言い残して葵は後ろに下がっていく。葵が下がると予めこうなることを解っていたのか、三人の鬼が前に出てきた。

やはり、星熊勇儀と伊吹萃香がいるか。ん？迅も出るのか。迅の時だけは真面目にやってやろう。久しぶりの闘いだからな。それ以外はてきとーに遊んでから終わらせよう。てかあと一人いなくないか？

「おい、一人足りなくないか？」

「ふふふ、それは後のお楽しみだよ。まあ、その前に終わってしまうかもしれないがな」

妖しい笑みを浮かべる葵

「あっそ。

『実は最後の一人はこの私だ！』とか、

そんなありきたりなことだったら白い目で見るぜ？まあ、流石にそんなことはないと思うがな」

「あ、あああ当たり前だろ！そそそんなわけないだろう！」

図星か。まあ相手が鬼子母神でも運命は変わらないがな。能力があれば変わるかもしれないがな。

そんなことを思っていると姐御肌に定評がある勇儀が近寄ってきた

「私は星熊勇儀。よろしくね。あっちの二本角の鬼は伊吹萃香。そんで彼は「天音迅でしょ？」：先刻のもあるけど彼とは知り合いなのかい？」

「永年憑れそった相棒だよ」

あ、その顔は信じていない顔だな。まあ、私にとってはどうでもいいことなんだけどね。

「・・・そうかい。
先鋒はお前でいいのかい？」

「ええ。晴明の出番はないと思うしね。
あなたたち程度の実力で私に傷一つ付けられないと思うし、まあ、迅は除くけど」

ピクリと勇儀の顔に青筋が浮かぶ

「ほう…。ほえたな人間。あまり調子に乗っていると痛い目見るぞ？」

「その言葉をそっくりそのまま丁重で丁寧に返して上げるわ」

私はそう言ってにこりと微笑んだ。早く始めたいな～。そして寝たい。

「まあそんなことはさておいて、そっちの先鋒はあなたでいいのかしら？」

私は勇儀にそう訊ねる

「先鋒は萃香だ。次は私で最後は迅さんよ」

勇儀はそれに応えた。

最初は萃香か。確か能力は『密と疎を操る程度の能力』だっけ？とくに危険視するまでもないな。

「そうか。ならさっさと始めようか」

「…わかった。せいぜい、自分の愚かさに後悔するといいわ」

そう言って勇儀はいつのまにか張ってあった結界の外へと出る。たぶん、（結界は）晴明が張ったんだろうな。晴明に視線を向けると鬼童丸と茨木童子がいるところに移動していた。迅もそこにいた。

「さて、萃香。準備はいいかい？」

私がそう訊ねると、ストレッチをしていた萃香はニヤリと笑みを浮かべた

「準備万端よ。せいぜい愉しませておくれよ？」

強さで傲慢をするのはルシファーかギルガメッシュだけでいいよ。ギルガメッシュって言っても、歌舞伎の方じゃなくって金ぴかの方ね。

「それでは……始め！」

葵が開始の合図をすると同時に――――

――――萃香に黄金の龍が襲い掛かった――――

力の差は絶望（前書き）

駄文を極めることに決めました。

相変わらずのgdgd具合ですが、どうぞ

力の差は絶望

周りは何が起こったのか理解出来なかった。戦闘開始の合図がしたと同時に萃香が黄金の龍に襲われたからである。しかし、周りが理解出来ない中、一部（刹那を知っている四人）は何が起きたのかは理解出来ていた。

「『黄龍』か…」

迅はポツリと呟く。隣りにいた三人は『ああ～やっぱりか』みたいな表情をした。

『黄龍』とは、信念を極めた者のみが達する無明神風流の最終奥義である。神風で象った四神を同時に放ち、玄武で相手を拘束して青龍・朱雀・白虎が追撃して、天から降りてくる黄龍でとどめを刺す究極奥義である。だが、これには例外があり単独で黄龍を出すことも可能である。（S・D・KYO38巻参照）

刹那は開始と同時に目にも止まらぬ速さで刀を抜刀し、『黄龍』を出して萃香に攻撃したのである。その抜刀を目視できたのは迅ただ一人であった。

「あるぅえ～？まさかこれで終わりとか言わないわよねェ～？気休め程度に手加減して上げたんだから死んでいないでしょう？まあ死んじゃって逝っても“虚構（なかったこと）”にして上げるから安心しなさい♪アハッ☆」

にこやかに優しく笑う刹那。その表情は美しく狂っていた。

その笑顔を見て、あの時（トラウマ）を思い出したのか茨木童子は（（（。Д T；

）））としていた。

「戸隠山投げ！！！」

萃香がいた所から巨大な岩が飛んできて刹那に迫る。刹那は避けるそぶりもせず、ただの蹴りで破壊する。

「ん？」

刹那が岩を破壊すると同時にその岩の後から鎖が現れて、刹那をぐるぐる巻きにがっちりと拘束した。刹那はその鎖を破壊しようとしたが止めといた。どうせなら一発喰らってやろうと思ったからである。

「はぁはぁ…、ガードしていなかったら死んでいたよ」

砂埃が晴れ、そこから所々から血を流した萃香が現れる。萃香はギュッと刹那を逃がさずよう鎖を握っている。

「そうこなくっちゃ♪
てか、闘気も余りこめてない黄龍（わざ）で死んだら期待外れだけどにゃ☆」

「なっ！？」

萃香は驚愕する。あの威力で手加減されていたことに。そして同時に怒りを覚えた。闘いに手加減されていることに。

鬼は手加減を嫌う。鬼は決闘のさいは、いつでも真剣勝負で正々堂々と闘いを好むものである。お遊び程度だったら手加減はしてはいるが、決闘のさいは手加減無しの真剣勝負で行うのがルールである。

故に萃香は切れていた。

萃香が切れているのを感じ取った刹那は、にこりと笑みを浮かべて言い放った

「もしかして、手加減されたから怒っているのかしら？
やれやれ、思いあがるなよ小物が。あなた程度の実力で私を本気にさせるなんて百年以上早いわよ。
私に本気を出させてみたかったら、私に傷一つ付けてみなさい。そうしたら一度だけ見せて上げるわよ？」

「まあできたらの話しだけでどね」と最後にそう付け加えて言った。

「あなた、今の自分の状況を見てよくそう言えるわね。」

「自分の状況？
……ああ、そういえば縛られていたわね。まあこの程度の鎖だったら簡単に壊せるけどあえて壊していないだけよ。私を縛りたかったらグレイプニルでも持ってきなさい」

「ほざけ！」

萃香は重いっきり鎖を引っ張り、刹那を引き寄せる。抵抗もなく引っ張られた刹那に萃香は空いている拳に妖力を溜めて渾身の一撃を打った。

「はあああああ！！！！！」

ドゴン！と鈍い音を立てて刹那の腹部に激突する。普通の人間がく

らえば一瞬として上半身がおさらばするが、刹那はそうはならなかった。そして萃香はある違和感に気付く。当てた筈なのに当たりが浅いことに。

「なぁ～んだ。その程度がお前の本気(いちげき)かい？期待して損したよ」

心底残念そうに刹那は呟いた。
そして同時に刹那の体がパシャァンと水音を立てて破裂した。

「！？　水の分身！？」

萃香は必死に気配を捜すが気配の“け”の字も感じることが出来ず、ぬらりと刹那は萃香の影から現れた。

「気付くのが遅いわよ」

「なっ！ガハァッ！！？」

そして強烈な蹴りが振り返った萃香の腹部に突き刺さり、萃香は数十m先まで吹き飛ばされて結界に激突した。

「さて、次も試合があることだし、勝負を決めますか♪」

次の瞬間、刹那は隠していた“畏”を解放した。
ゾクリッ――とこの場所にいたものに刹那の“畏”が襲い、下位の鬼たちは意識を失い、中位以上の鬼たちは何とか意識を保つ。鬼子母神の葵は無意識に一歩下がっていた。
刹那の“畏”になれている……というのはおかしいが、迅や晴明と二人の鬼は『相変わらずだなぁ～』と言った表情で刹那の“畏”を感じていた。

「『天獄城』」

その言葉とともに空間が白に染まり、刹那の背後から禍々しく神々しい混沌と秩序な雰囲気をさらけ出した醜悪で美善な城が現れた。そしてその城から二人の鬼が出てきて、刹那の両隣りに立った。

「前鬼の修羅」
「後鬼の羅刹」
「「只今参上」」

一人は紅い髪の偉丈夫の男で両手に三叉戟を持ち、もう一人は銀髪で長髪の凛々しい女性で手には長刀を握っていた。

「なんであの二人が！？」

場所は変わって結界外。刹那の両隣にいる二人に葵は驚愕する。葵はあの二人を知っていた。

『修羅の空海』と『羅刹の桜花』。それが彼らの名前である。葵は昔、彼らと逢ったことがあった。若気の至りで彼らと闘いを挑んだが惨敗。手も足も出なかった。数百年後にまた出逢い、力を付けて闘いを挑むが負けて未だ勝利したことがない。

「知っているんですか？母様？」

勇儀は二人のことを葵に訊く

「ああ。彼らの名前は空海と桜花。私が未だ勝利したことがない鬼神だよ。能力を使用してもね。」

「!?」

その返答に勇儀は驚愕する。

葵の能力とは『正々堂々を操る程度の能力』と謂い、自分と対峙する者を正々堂々（こうへい）に勝負を決めることが出来る。『地上のみで闘う』であれば空中に上がることができなくなり、『己の力のみで闘う』であれば能力が使用不可になる。

その能力を使い『己の力のみで闘う』をして勝負を挑んだのだが、それでも勝てなかった。

「しかし何故あの二人があの娘っ子に…?」

葵は疑問に思う。何故刹那に従っているのか?

『修羅の空海』と『羅刹の桜花』の二人は、自分より強いものにしか興味を示さない。ましては従うなどもってのほかである。

その疑問に迅が呟くように応えた。

「…空海と桜花は、空海は刹那の強さに憧れて桜花は刹那の強さに惚れて自ら刹那の眷属になったのだよ。」

「「!!?」」

葵と勇儀は驚愕する。周りで聞き耳を立てていた鬼たちは騒然として静まり返っていた。

「そ、それは本当か迅?!」

「本当だ。現に私もそこにいたからな。というよりかは一緒に闘ったな」

懐かしいな…。と迅は昔のことを思い出してしみじみするのであった。

「そんな…しかし、ありえない!?」

「普通だったらそう考えるだろうな。ところで葵、お前は殺気には敏感だったな」

迅は思い出したかのように葵に訊く

「あ、ああ。それがどうしたんだい?」

葵は突然、話しが変わったことに困惑するが素直に答える

「葵は刹那から出てる殺気に“気付けて”いたか?」

迅の妙な質問に葵は首を傾げる

「何を言っているんだい迅?あの娘っ子から殺気なんか…」

「そうか。やはりか…。

…はっきり言おう。葵、お前は刹那に負ける。必然的にな」

「なっ!?　なんでそんなことが言えるんだ!!」

迅の身も蓋も無い言葉に葵は憤慨する

「なら集中して殺気を探してみろ。そうすれば理解するだろうな」

葵は納得しない表情をするものの集中をしだす。十秒後、刹那の殺気を見つけた瞬間――葵の首が撥ねた。

「――――ッ!!!!??」

葵は首を抑えて悲鳴を必死に押し殺し、片膝をつく。顔面を蒼白にし、大量の脂汗を吹き出した。

「大丈夫ですか母様!」

勇儀は葵に駆け寄る

「なんだい…、この、尋常じゃない殺気は……一度、首が撥ねた幻覚が見えたわよ?」

「それが刹那の殺気だ。しかも最悪状態のな」

ハァ～と迅は頭を抱えた

「ああ最悪だな」
「最悪ですね」
「最悪すぎるな」

続けて茨木童子、鬼童丸、晴明も頭を抱え出した

「しかも、その原因が葵…お前だよ」

「えっ！私が！？」

「ああ。普段だったら“性別”を間違えてもああにはならないんだが、今の刹那の状態は運悪く不機嫌だからな、知らなかったからしかたがないが…」

「ちょっと待ってくれ迅」

葵は迅にまったを掛ける

「なんだ？」

「“性別”を間違えたとはどういうことだ？どうみても刹那はむす「言わせん！」んッ！」

迅は葵の口を手で塞ぎ、先を言わせなかった

「お前は私の苦労を無駄にする気か！いくら慣れているとはいえ、落ち着かせるのには精神を使うんだ！」

「もごもごもごっ！」

「それにあれを見てみろ」

葵は刹那に視線を向ける。刹那の周囲に五つの燃えたぎる剣が浮かび上がっていて、全て剣先が葵に向いていた。

「あの剣は“妖力殺し”の概念を付加している妖怪殺しの剣だ。一つでも当たればアウト。全ての妖力をねこそぎ持ってかれて死に至る。もし、お前が最後まで言っていたらあれが来ていたんだぞ？」

「もごもごもごっ！
ぷはぁっ！はあはあっ！そうだったのか…」

迅の手から逃れた葵は嘘では無いことに恐怖した

「そうだったんだ。今後刹那の性別を間違えるなよ？あの也だが刹那は『男』だ。解ったな？」

「語尾に“の娘(のこ)”が付くんですね、わかりまＵｖｏａａａａ！！！！」

余計なものを足した茨木童子(ゆうしゃ)に燃えたぎる剣とは別の剣の制裁が降された。茨木童子(ゆうしゃ)はどこぞの皇帝みたいな叫び声を上げて倒れた。

「ああ、なるからな」

「理解した。肝に銘じるよ」

そして場面は戻る。

「「主、ご命令を」」

二人は騎士が主に忠誠を誓うように膝をつき、刹那の命令を待つ。

「ん。じゃあ、降参するって言うまで痛めつけちゃって♪

私は優しいからね！殺しはしないんだ！アハッ☆」

「「・・・御意に」」

一瞬、刹那の笑顔を見て身震いしたのは気のせいだろうか？

刹那の両隣にいた一瞬で消えて、刹那の“畏”を浴びて硬直していた萃香の目の前に現れた。

「っ！？」

「恨むなら自分の愚かさに恨むのだな」

空海は三叉戟を突くが間一髪、萃香は密度を上げて霧になり攻撃を回避する。

萃香はそのまま霧になり、空海と桜花の攻撃を透過し続ける（というよりかは反撃ができない）がそれは長くは続かなかった。

「『必中の戟・百捌』」

空海は１０８回の高速突きを萃香に突く。萃香は霧になって攻撃を透過させようとしたのだが、

「！？　がぁぁぁぁぁぁっっ！！！！！」

透過せず１０８の高速突きが全て当たり、萃香は崩れ落ちた。

何故、空海の攻撃が透過せずに当たったのかは『能力』を使ったからである。

空海の能力は『必ず中てる程度の能力』といい、その名の通り攻撃

を必ず中てることが出来るのである。だから霧になってた萃香にも攻撃を当てることができたのである。
（因みに桜花の能力は『概念を無視する程度の能力』であり、萃香の能力を無視して攻撃を当てることができたが、どうせ空海が能力を使うだろうと思い使わなかった）
空海は萃香の首元に三叉戟を突き付ける。
「“降参する”のであれば命までは取らん。さて、どうする？」
空海のその問いに萃香は顔を上げて力無く答えた
「わかった。降参するよ。もう闘う力なんて残っていないからね」
萃香は潔く降参をした。空海と桜花はそれを耳にすると一度頷き、刹那の元へと戻っていった。
「「只今戻りました」」
「ご苦労様♪あとでご褒美上げるね♪」
「「有り難き幸せ」」
そう言うと二人は天獄城へと姿を消して、刹那が“畏”を解除したことにより天獄城は消え去った。

番外編？：壬生での暮らし（前書き）

番外編です。

そして駄文です。

番外編？：壬生での暮らし

この話は刹那の壬生での暮らしの日常を書いたものです。思い付きで書いたもんですが、本編に少し関わるかも知れません。

時間軸は初代・紅の王が座を引退し、先代・紅の王（壬生京一郎）に引き継いだ――ぐらいです。本当は当代・紅の王（壬生京三郎）が引き継ぐ予定だったが、当代・紅の王はそれを拒否して京一郎に座を譲ったらしい。（それと、太四老の長は村正。あとの三人は吹雪・ひしぎ・伊庵である。）

「京一郎、来てやったわよ」

「あ！刹那！待ってたよ～」

蝋燭の明かりしかついていない暗い書庫。此処には“真の壬生一族”が遺したたくさんの書物が眠っている。

ぐるぐる眼鏡をかけた京一郎は嬉しそうに笑みを浮かべながら私に近寄ってくる。あ、こけた。

「あっははは！転んじゃったよ！」

鼻を強打したらしく鼻が赤くなっている。それを気にせず笑っている京一郎に私はため息をつく。

「はぁ～。それで私に何の用だ？」

「まあそう焦らない焦らない。
いろんな書物を読んでいたらね、君が興味持ちそうな書物を見つけたからこれ読んでみてよ！」

そう言って私に書物を渡してきた。書物には『剣術・窮み編』と書かれてあった。

「これは？」

「そのまんまの意味だよ。ありとあらゆる剣術がそこに詰まっているんだ！」

「へぇ～」

私は書物を読み始める。
無明神風流や無明歳形流も書かれてあるな。へぇ～、神鳴流ってぇーのもあったんだな。あとは虚刀流や飛天御剣流っつーのも書いてあるな。
しばらく読み続けてパタンと書物を閉じた。

「ふむ。」

「どうだい？」

「ああ、よかったよ。有り難く読ませてもらうよ」

「喜んでもらって嬉しいよ！

そうだ。これも面白いから読んでみなよ！」

そう言ってどんどんと書物を渡される。ちょっ！多い、多いって！

「ちょっ！まっ！多いって京一郎！」

「あっ、ごめんごめん！」

私の手には十数冊の書物が積もられている。重くはないが、前がよく見えない。

「はあ、まったく…。まあ有難うね。」

私は書物を影にしまい込んでお礼を言った

「どういたしまして♪」

京一郎はニコニコと笑みを浮かべて返した

「それじゃあ私は用事があるから行くわね」

「あ、待って刹那！君に聞きたいことが一つあるんだけどいいかな？」

「何かしら？」

私は足を止めて京一郎に振り返る

「刹那は…今でも僕と心友（とも）でいて倖せかい？」

先刻まで表情とは打って変わり、真剣な表情をする京一郎。私はそんな京一郎に呆れ笑みを浮かべて、京一郎の前まで行きくしゃくしゃと乱暴に頭を撫でた。

「倖せよ。それと、京一郎は勘違いしてるわよ?私はあなたとは心友じゃなくって・・・」

私はそこで一旦句切、笑顔で答える

「家族(きょうだい)よ」

「っ!…そうか、そうだったね!
アハハ!僕は何を言ってるんだろうか」

京一郎はホッとした表情を浮かべて笑い出した

「そうよ。それじゃあ私は行くわね」

「あ、うん。またね刹那!」

刹那は頭に乗せてた手を引き書庫から出ていった。・・・と思ったら戻ってきた。

「どうしたんだい?」

「いや~ね、もう一つの用事を思い出したんだよ」

刹那は京一郎の襟首を掴む

「え?」

「ひしぎに頼まれてね。『紅の王を見つけたら私の所まで連れて来て下さい』ってね」

「えっ、ちょっ！」

ズルズルと京一郎を引きずりながら私は書庫を後にして、ひしぎが待っている執務室へと向かった。

京一郎をひしぎに引き渡した私は村正の家に向かっていた

「来たわよ～」

「えぇ待ってましたよ」

村正家の裏に回ると縁側に座って瑠璃（小鳥）と戯れている村正がいた。村正は私が来たのを確認すると、ニコリと優しく微笑んで出迎えてくれた。

「中で座っていて待っていて下さい。昨日、美味しい羊羹を頂きましてね」

「お～、わかった！」

村正は腰を上げて奥へと消えていった。私は靴を脱ぎ縁側からお邪魔して、居間に座って待つ。何故か頭に瑠璃を乗せながら。

「お待たせしました」

数分後、お盆に二つの湯飲みと美味しそうな羊羹と茶請けを持ってきた村正が登場した。

「おぉ～、うまそうだな！いただきま～す♪」

「はい、いただきます」

パクリと一口。

むっ！これはなかなか美味いな！甘すぎずほど好い甘さでこれはお茶にかなり合うな。

「ふふふ…」

村正は羊羹に手をつけずにずっと私を見て微笑んでいた。何か顔についてんのか？

「どうした村正？私の顔に何かついているのか？」

「いえいえ、気にしないで下さい」

「ん。そうか」

私は気にせず食べることに集中した。

その後も村正はずっと私を見てニコニコと微笑んでいた。

「ごちそうさま～」

「はい、お粗末さまでした」

羊羹を食べ終えた私は、村正と縁側に座ってお茶を啜りホッと一息をついていた。そして未に瑠璃が頭に止まっています。

「そーえばさ、吹雪と姫時ってどこまで進んだの？あれからなんか進展あった？」

ふと、私は気になっていたことを訊ねる。

「吹雪と姫時の二人なら結婚しましたよ。姫時もお腹の中に子を授かっています」

「えっ！マジで！？」

いつのまに結婚したんだあいつら！？

「はいマジです。二人が式を挙げたのは刹那が壬生の地を離れて旅に出てから一週間後ですね」

「なんだよ～。言ってくれればよかったのに～」

ウダ～ッと私は仰向けに倒れた。

何故私が省らなければならんのだ！友人の晴れ舞台を祝っちゃならんのか！

「私もそう言ったのですが、吹雪が言わないでくれと頼まれまして

ね。」

「あのモサモサ頭め～」

今度会ったらあのモサ頭を三つ編みにしてやる。

「まあ、そう思わないで下さい。珍しく吹雪が恥ずかしがっていたんですから」

「だからって友人を誘わないってどうよ？
はっ！まさか、友人と思っていたのは私だけだったのか！」

そうだったらなんか鬱りそうだ…

「そんなことありませんよ。刹那は今でもずーっと私たちの友人ですから安心して下さい。」

そう言って私を引き寄せ膝に乗せるとポンポンと頭を軽く叩いて優しく撫でてきた。

「む～。そうだったらいいのだがな」

私はしばらく村正に撫でられた後、膝から降りて再び縁側に座り、少し雑談した後村正に別れを告げて村正家を出て、ひしぎがいるであろう研究室へと向かった。

「よう！遊びに来たぜひじき！」

「三時間ぶりですね刹那。それと私はひじきではなくひしぎです」

ひしぎは呆れ顔をする

「知っているわざとだよワカメ」

「もはやカスリもしていませんね。それで、何か私に用ですか？」

「いんや。暇だから来ただけさ」

「まあでしょうね。刹那が用が会って此処に来るなんて、一度も合ったことがありませんし」

「まあな！
ところで何だそれ？」

私はひじきの「ひしぎです」…ひしぎが手にしているフラスコを見て訊ねる。フラスコの中には怪しい緑の液体Xがボコボコと泡立っていた。

「これですか？これは『特殊刺激剤（クライム・モンスター）』って言って、肺や心臓をはじめ全身を強化する強化剤ですよ」

飲みますか？、とひしぎは私に特殊刺激剤が入ったフラスコを勧めてくるが、私は丁重に断っといた。

「冗談ですよ。刹那はこれを使わなくとも充分強いですしね」

「当たり前よ。あ、そうそう、これあなたに上げるわ」
私は虚空から古びたノートを出して、ひしぎに渡した
「これは？」
「医神のアスクレーピオスが使っていたノートよ。内容は全部覚えたし、必要無くなったから上げるわ」
「そうですか・・・って、はっ？」
あっけらかんの表情をするひしぎ。そんな表情をするとはレアね。
カメラでも用意してればよかったわ。
「どしたよ？」
「いえ、ちょっと今ありえない人が使っていたノートと聞いたので・・・それで誰が使っていたノートですって？」
「アスクレーピオが使っていたノートよ。直接本人から貰ったから間違いないわ。それにそのノートの裏にちゃんと『アスクレーピオ』って書いてあるわ」
そう言われてひしぎはノートの裏を見る。そこにはちゃんと『アスクレーピオ』と英字で書かれてあった。
「・・・流石、非常識の塊と呼ばれるだけありますね。普通、こういった物は貰えませんよ？まあ、刹那だからしかたありませんか」

ひしぎは悟った表情をして自問自答し、自己解決する。…って、誰が『非常識の塊』だ。誰が。

「煩いわよ。それに『常識は投げ捨てるもの』ってどこかの聖人が言っていたわ。」

ん?命は投げ捨てるものの方だっけ?まあいいや、どっちでも。

「どこの聖人が言ったんですかその言葉は。ちょっと私の前に連れて来て下さい。説教して上げますから」

「ごめん間違えた。確か『命は投げ捨てるもの』の方だった」

「余計酷い!?」

閑話休題。

「まあ、取り敢えず有り難く貰っておきますね。」

「ん。貰っときなさい」

それから少し雑談してひしぎの研究室を後にした。

そして、今私は壬生の城下町でぶらぶらしている。城下町の人々は私に気付くと明るく挨拶してくれる。私は一人一人に挨拶を返しながら歩いていると、八百屋のおっちゃんと話してる時雨を見つけたので、

「こんにちワン！」

「うおっ！」

毎年恒例の跳び蹴りをかましたのだが、チッ！防がれたか。八百屋のおっちゃんは吃驚していたが、蹴ったのが私だと気付くと“ああ、いつものか”みたいな表情をして私に挨拶するのであった。

「何奴ッ！？――ってやる奴は一人しかいないか…」

「よう、時雨。ご機嫌いかが？」

「絶頂に最悪だ。刹那」

跳び蹴りを防いだ腕を痛そうにさすりながら応える時雨。
彼の名前は『時雨』。時雨は身分の中でも上層部の家系を持ち、将来に辰伶とほたるの親父になる男だ。何故それが解るかと云うと、彼の剣術が『舞曲の太刀』だからである。彼以外に舞曲の太刀を使えるのは私は知らない。あとは『勘』である。

「そいつはよかった」

「いやよくねぇからな！？てか、何でお前はいつもオレに跳び蹴りをしてくんだよ！」

「そこに時雨がいたから（キリッ」

「『そこに山があったから』みたいに言ってんじゃねぇよ！！」

怒鳴る時雨に私は笑いながら流した

「そんじゃ、やることやったしまたな！」

私は時雨に別れを告げて、ぶらり壬生歩きを再開した。後ろで「『またな！』じゃねぇぇえぇぇぇ！！！！！」と聞こえるが空耳だろう。そう思いながらぶらりと城下町を歩き回るのであった。

不慮の事故ですから（前書き）

深夜のテンションで書いたため滅茶苦茶で、支離滅裂で、荒唐無稽な駄文ですがどうぞ。

不慮の事故ですから

萃香を倒し、次は星熊勇儀との戦闘になる。確か能力は怪力乱神を持つ程度の能力だっけ?どんな能力かよく解らんが螺子伏せるのみだ。
萃香はどうしたかって?勇儀が駆け寄ってきて担いでき結界外に連れていったよ。今は酒呑めるまで復活してる。

「さて、萃香がやられたのは予想外だ……と言いたいが、迅さんから聞いたよ。まさか、人間じゃなくって神だなんてね。してやられたよ」

「“元”人間だけどな。
ならどうするかしら?今の私は心優しいから、棄権してもいいのよ」

まあ無いと思うけどね。茨木童子や鬼童丸と違い、鬼は基本戦闘狂だし、相手が強ければ強い程燃えるらしいからな。

「はっ!冗談を!
私ら鬼は相手が強ければ強い程燃える種族でね、例え相手が神だろうが何だろうが関係無いよ!」

そう言って勇儀は構えた

「あっ、そう。
なら、そんなあなたにチャンスを上げるわ♪」

私はニコリと笑って腕を組み仁王立ちする

「チャンス？」

「ええ、三分間・・・三分間だけ私“は”此処から動かないし反撃もしないで上げる」

私がそう言うと勇儀の雰囲気がガラリと変わり、ヒシヒシと怒気が伝わってくる

「・・・それは私をなめているのか？」

「ええ、なめているわよ♪

先刻、貴女を『解析』したけどはっきり言って弱いわ。

萃香よりかは強いと思うけど、それは『力』だけ。それ以外は全然駄目駄目ね。『力』が強くったって、当たらなければ意味が無い。

“畏”を使えてたら話しは変わっていたかも知れないけどね。

んで、そんな貴女に同情した心優しい私“は”三分間だけ動かず攻防せずに貴女の攻撃（ちから）を全て受け止めて上げようと考えたのよ。」

「だけど『不慮の事故』が起きても何も言わないでね？」を付け加えて、ここにこと変わらない表情ではっきりと応えると、怒気がさらに強くなった

「・・・いいだろう。その提案に乗ってやるよ。

そして後悔するんだな、自分の傲慢さに！！！」

怒号とともに勇儀は走り出し、私は仁王立ちをして構える体制を取る。

「最初っから全力で行かせてもらうぞ！一歩ッ！」

勇儀は大きく地を踏み付ける。踏み付けられた場所は陥没して小さな地割れが起きる

「二歩ッ！」

勇儀は大きく拳を振りかぶる。振りかぶってる拳には濃密で圧縮された妖力が集中する。

「はあぁぁぁぁ！三歩ぉぉぉぉぉ！！！！！」

濃密な妖力が込められた拳が刹那に炸裂したと同時に爆音が響き渡り、砂ぼこりが二人を包んだ

「や、やったんか？」

一匹鬼が言う。砂ぼこりで姿は確認しづらいが立ってる者は一人だけだということが解り鬼たちは歓喜する。だがそれは一瞬だった。砂ぼこりが晴れると立っていたのは――青山刹那だった。その前には腹にデカイ穴を空けて意識を失っている勇儀が倒れ伏していた。

「だから言ったじゃない『不慮の事故』には気をつけてねって」

“不慮の事故”……その言葉を聞いて茨木童子と鬼童丸と晴明の三人は『うわぁ…』と表情をして引いた。

「っ！勇儀ぃぃぃぃ！！！！」

萃香は急いで勇儀の元へ駆け付ける。能力を使って勇儀の傷口を塞ぎ応急処置をした後、怒気を含んだ眼で刹那を睨みつける

「お前！三分間攻撃してこないんじゃないのかよ！！？」

「ええ。私“は”攻撃もしてないわよ。だってこれは『不慮の事故』だもの」

「不慮の事故？！これの何処が不慮の事故なんだよ！」

「不慮の事故よ。私“は”一度も動いてないし攻撃してないわ。なら、迅に聞いてみなさいよ。迅なら不慮の事故の意味が解るから」

刹那は視線を迅へと移す。萃香も釣られて迅へと視線を移した

「確かに『不慮の事故』だな。」

迅はこくりと頷いて肯定をした。だが、萃香はまだ納得できてないようだ

「不慮の事故って、どこが！？」

「萃香。どうやらお前は刹那が言っている『不慮の事故』の意味を根本的に勘違いしているようだな。知らないから無理もないが…」

「どういう意味よ？」

「刹那が言っている『不慮の事故』……いや、『不慮の事故（エン・カウンター）』は自分が受けたダメージを自分以外の他人に“押し付ける”ことが出来るスキルだ。
だから刹那は自分からは攻撃していない。矛盾しているようだが矛盾していないのだよ。」

「そういうこと。私は攻撃“した”んじゃなくって、攻撃を“押し付けた”だけよ。そこんとこは勘違いしないでね♪」

アハッ☆と刹那は狂おしい笑顔をして言い放った

「さて、次は迅との勝負か。
久しぶりだから真面目にやるか！まあ、迅だけだけどね」

刹那は何事もなかったかのように、次の対戦の準備をするのであった。

速度を司る鬼神（前書き）

深夜のテンションで書きました。

支離滅裂な駄文ですがどうぞ。

速度を司る鬼神

鬼に二匹を倒して、本日のメインである迅と闘うことができるよ。え？もう一人いるじゃないかって？知らんわそんなこと。てかどうでもいいし。

「先刻も言った通り、お前と闘うのは久しぶりだから真面目にやるとしようか。‥‥晴明！結界の強度追加よろ！」

「もうしてあるぞ！」

「さすが晴明！
じゃあ、さっそく‥‥‥始めようか？」

刹那から尋常じゃない程の闘気が溢れ出る。その闘気は空間を軋み上げ、地響きを起こす。その闘気に当てられた鬼は次々と気絶していった。

「ああ、そうしよう」

同じく迅からも尋常じゃない程の闘気が溢れ出る。その闘気は刹那とは違い、『静寂』。言うなれば嵐の前の静けさだろう。

「「‥‥‥」」

静寂が辺りを包み込む。二人は静かに構え、見つめ合ったまま微動だにしない。

――――カサリッと葉が落ちると同時に二人は消えた。

「…はっ？」

勇儀が声を零す。

比喩では亡く“消えた”のだ。いや違う。ただ、速すぎて視認できないのだ。

「あ、刹那の右が入った」

「いや、躱して迅さんの右が入ったな」

「いや、それを後ろに体重をあずけることで躱して蹴りが入ったぞ」

だが、それを視認できる三人は戦闘を実況していた。

茨木童子と鬼童丸の二人は『修業コース：獄』のおかげで刹那と迅の戦闘が見えるのであった。一方の晴明は、その二人の修業を見ていたせいか視認が可能であった。

「あんたら、あれが見えるのかい！？」

葵は驚いていた。一応、葵も見えることは見えるがはっきりとは見えず、ところどころがぼやけて見えていた。

「ああ。あの程度の速さだったら見えるぞ。何年も『修業コース：獄』をやっていたら嫌でもな」

修業コース：天のペナルティで何回も地獄を味わっている茨木童子が応えた。説得力があるな。

「それにまだ二人は本気出していないだろう。いわば準備運動だな、あれは」

「あれで準備運動だと!?」

さらに葵は驚愕した。あの闘いがただの準備運動だということに。

「ああ。結界に衝撃が来てないのもあるが、体術だけでしか闘ってないのが証拠だな」

そう応えて茨木童子は視線を戻す。

ドゴンッ!と轟音と同時に二人の姿が現れた。二人はいたって外傷が無く、激しい戦闘音とは裏腹に無傷であった。

いや、あの程度の闘いは戯れでしかなかった。故にここからが本番であった。

「準備運動はこれくらいでいいわね」

「ああ、そうだな」

刹那は軽く屈伸をしてから腰に掛けてある愛刀の『雪月花』を抜き、迅は双刀の哭刀『雛』と魄刀『梟』を抜いて構えた。

「先手は貰うわよ!
無明神風流奥義『黄龍』×3!」

天を貫き萃香の時とは比べもののならない三匹の黄金の龍が迅へと

襲い掛かる。迅はそれを迎撃しようと技を放とうとするが、

「ぬっ！」

影から生えた鎖に縛られて動けなくされる。迅は鎖を破壊しようと力を入れるが軋みさえもせず、逆に力が抜き取られる感覚に襲われる。

「追加ァーッ！
天魔・闇流奥義『骸・朱雀』！」

闇の炎を身に纏う骸の朱雀が迅へと襲い掛かる。

「覇ァッ！」

迅は迫りくる四匹の闘気（けもの）を“畏”を使わず自らの闘気を放出して相殺する。闘気を放出したことにより影の鎖が破壊されて迅の身動きが自由になり、迅は反撃を開始する。

「神速『零戦“千機”』！
追加、神速『零戦“殲騎”』！」

光速の居合い抜きにより発生した数千数万の剣圧：いや、剣壁が刹那に襲い掛かる。

「迎え撃つ！
無明神風流奥義『朱雀』！」

刹那は朱雀を放ち、数千数万の剣圧を相殺した。

「剣戟『櫻の木』」

「っ！」

壁の向こう側には“畏”を鬼纏い三本角の鬼の仮面を被った迅が隠れており、その背後からは墨染で描かれたような櫻の木が剣戟となり刹那に襲い掛かる。

「遮影ッ！」

刹那は即座に自身を影で覆い剣戟を無効化する。さらに影を使い周囲に無数の黒い影剣を投影して浮かび上がらせる。

「『無影無踪』」

浮かび上がっていた影剣は怒涛の勢いで迅へと向かう。四方八方、雨霰の如くに降り注ぎ、疾風怒涛に襲い掛かる影剣に迅は自身の周囲の時間を“遅延（おそく）”させて回避していく。だが、それでも影剣の速度があまり変わらず、紙一重で躱し、当たりそうになったものは双刀で逸らし、破壊していく。反撃を試みようとしたが影がある限り無限に生み出される影剣に回避するので精一杯であった。

「『影絵・黒狼』」

「ッ！？　チィッ！」

迅の影から無数の黒い狼が現れて襲い掛かる。迅は哭刀『雛』で一掃するがそれによってスキが生まれ、影剣が迅に突き刺さる。

「ッく！？しまっ…」

迅は慌ててそれを抜こうとするが、刹那はそれを許す筈がなく

「爆ぜろ。『夢幻儚影』」

瞬間、降り注いでいた影剣や地に突き刺さっていた影剣が全て爆発した。その爆発で生じた衝撃波が結界を大きく揺らした。

爆発で生じた粉塵が晴れると、服はボロボロだが外傷があまり見なれない迅が堂々と立っていた。

「…一応、殺すつもりで戮ったんだけど」

「あの大戦時みたく、治癒速度を極度に速めただけだ。中はかなりダメージを受けているさ」

「そう。それは安心した…わ！」

先刻と同じく刹那は無数の影剣を投影し、迅に向けて放った。

「同じ技は二度喰らわん！剣戟『櫻花惨散』！」

迅は闘気を纏った双刀を縦横無尽に光速に振るう。

一閃。ただそれだけで無数の剣戟が生まれ、その剣戟が桜の花びらの如く舞い踊り、影剣を防ぎ破壊していく。

「これはちょっとやばいわね。無明神風流奥義『玄武』！」

刹那を玄武の甲羅を模した神風が覆い絶対防御の神風が攻撃を防いでいく。数千数万の剣戟が舞い散る桜の花びらの如く甲羅に襲い掛

かる。ミシミシと軋む音を立てて、徐々に甲羅に亀裂が入っていく。
刹那は「耐えられるかな？」とボソリと呟き冷や汗を掻く。

「耐えられんよ」

その呟きに答えたたのは迅だった。迅は大きく身体を反らして突くモーションに入っていた。

「あらま」

刹那はダメージを軽減するため複雑な曼陀羅模様の障壁を展開する。まあ気休め程度でしか軽減できないだろうと思いながら。

「一点集中『櫻楳桃李』！」

さらに手首を捻り螺旋を加えて威力を上げる。威力が増大した櫻楳桃李は神風で創られた玄武の甲羅を砕き、複雑な曼陀羅模様の障壁をいともかんたんに打ち砕くと、刹那の殆どの右上半身を刈り斬り堕とした。

「ぐぅっ！！！！？
（右上半身が殆どやられたな、気合防御にしとけばよかったかもな。だが…）」

「ッ！？」

右上半身から夥しい量の血を流しながら刹那は被害が無い左腕を伸ばして迅の腕を掴み、絶対に離さないよう影の鎖で自分の腕ごと拘束する。そして、にたぁ～、と三日月のような笑みを浮かべて、

「つ～かまえた♪」

と呟いた。

「っっっっっ！！！！！？？？」

迅の脳内に警告音が激しく鳴り響く。野性的本能が今すぐに刹那から離れないととてつもなくヤバイと感じ取り、拘束している影の鎖を引きちぎろうとするがビクともせず、迅は片腕を犠牲にして離れることを決めて魄刀『梟』を自分の腕に振り落とそうとするが刹那はそれを赦さなかった。

「『緋龍葬送』」

刹那の上半身から流血した夥しい量の血は緋かい龍へと姿を変えて迅へと襲い掛かってきた。

「チィッ！？」

迅は自分の腕を斬るのを中断し、緋い龍を斬り払うことに集中をする。だが、刹那の攻撃はこれだけではなかった。

「『龍の赫き涙（ドラゴンレッドティアーズ）』」

無数の緋き龍は空高く天まで昇り、お互いに躯を衝突させ拡散し落下する。それは赫い雨となり二人がいる地上へと降り注いだ。

「ぐおおおぉぉぉぉぉ―――！！！！！！！」

赫い雨・・・濃硫酸の雨が二人を襲い、触れるもの全てを溶かしてい

く。迅は治癒速度を限界まで上げるがそれでも追い付かずキズの量が上回り、防ごうとも緋い龍がそれを許さず襲い続けているので防御が出来ず、キズが増える一方である。
だが、刹那にはその赫い雨が一滴もかかっておらず、むしろ赫い雨が自ら避けていた。

「『緋龍波状』」

赫い雨で溜まった赫い水溜まりが緋龍となり、そしてそれが津波と変化し二人を飲み込んだ。

「覇ァァァァァ！！！『儚散如桜』！！！！！」

ドパァァァンッ！と迅から膨大な闘気が放出して、緋龍と刹那もろとも吹っ飛ばした。

「よっと」

吹っ飛ばされた刹那は空中で一回転し、綺麗に着地した。そして虚空から雪月花を『右手』に出現させて握った。

「はぁ…はぁ…」

膨大な闘気を放出した迅は多大な闘気を消費したためか大量に汗を流して、大きく肩で呼吸をしていた。仮面が消えて、表情には疲労の色が見えている。そして迅の身体は所々流血しており、表皮が溶

けて骨が見えてる部位まであった。

「くっ…！」

迅は膝をついた。

「さて……まだ続ける？」

迅とは打って変わり、まったく疲れた様子を見せていない刹那。それどころか、殆ど失っていたはずの右上半身が綺麗に服までもが直っていた。

「大嘘憑き…か？」

「いんや、『細胞蘇生』だ。服は大嘘憑きで“戻し”たがな」

刹那は再生した右腕を回しながら応えた。

『細胞蘇生』とは、『細胞再生』の完了型。細胞で組織・構成されたものであるならどんな状態になっていようとも一瞬で蘇生することが出来る。

「いや、降参だ。今は治癒速度を上げるのに精一杯だ。惜しいところまでいったのだが残念だ…」

「ふふふ…。まあそう悔やむなって、私にあそこまで喰らわしたのは伊邪那岐以来よ」

私は迅に手を差し延べる

「そいつはよかった」

迅は私の手を掴み立ち上がった。

晴明の実力（前書き）

なんか、こう、うん。

駄文ですが、どうぞ。

晴明の実力

「晴明ー！勝負着いたし、帰るぞぉ～！」

迅との死闘を終え、私は全員と闘い無事勝利したので京の都に帰ることにした。早く夜雀の羽をもふって寝たい。

「ああ解った。茨木童子、鬼童丸、帰るぞ」

「「御意」」

晴明は結界を解き、式の二人を呼んぶ。二人は返事を返して晴明の後ろへとついて行く。そんな二人は安堵な表情を浮かべていた。

「迅、お前も来い。寝る迄の間なんか面白い旅話でも聞かせてくれや」

「ああ、いいぞ」

身体の疲れはまだ取れていないが、傷が治り全快した迅は頷くと刹那の隣りへと歩いていった。

「今日は宴会でもするか！京の都を救った記念に」

「いいですね」

「賛成！」

「しかし私は寝る！何故なら私は魚雷だから！（キリッ」

「いや意味解らんよ…」

「迅殿、気にしたら負けですよ」

「「そうですよ」」

「そうだ。気にするな、私は気にしない」
「「宴会と聞いて」」
「てめぇらにやる酒なんぞないわ！酒（りそう）に溺れて溺死しろ！」
「「なにそれ最高」」

和気藹々と愉しく談笑しながら京の都に帰ろうとする五人（＋二匹）に、

「待て待て待てえぇ～い！！！！！」

と大声を上げて待ったをかけた。五人（＋二匹）は怪訝な表情を浮かべて鬼子母神こと無果実葵へと振り返った。

「なに勝手に帰ろうとしてんだい！まだ後一人が残ってんだろう！」

『あっ』

葵以外のこの場に居た者達全員は今思い出したかのように声を漏らした。どうやら葵以外の全員は刹那と迅の死合が印象が強過ぎてすっかり忘れていたようだ。

「そういえばそうだったわね。てか、べつにそんなことどうでもいいんじゃね？
例え、今から四人目の相手が私と闘ったとしても勝負は目に見えているじゃない。それともあれかしら？四人目の相手は迅以上に強いのかしら？それだったら快く勝負を引き受けるわ。
・・・で、どうなの？」

「ぐっ…それは・・・」

葵は考える。四人目の相手・・・つまり自分は迅よりも強くない。例え能力を使用しても、倒せはしないだろう。どんな条件を付けて闘っても負けるのは目に見えていた。だけど鬼の本能としては闘いたい。
うんうんと頭を捻り必死に考えてる葵に、早く帰りたい刹那は案を出した。

「そんなに闘いたいなら・・・晴明！君に決めた！」

「いや何がだよ！？」

唐突もなく名指しされた晴明は即座にツッコんだ

「晴明、ちょっと葵と闘ってきてちょうだい」

「いやいやいや、何で闘わなければならんのだ！？」

「だって、晴明闘ってないじゃん？」

「いや、闘う必要無いって刹那が言ったんじゃ・・」

「私はそんなことは一言も言ってないわよ？」

「えっ？」

「えっ？」

「なにそれこわい」

なんやかんやで葵と勝負することになってしまった哀れな晴明。再度結界を引き、晴明と葵は対峙した。

「本当は刹那と闘いたかったのだがお主も興味を持っていたところだ。鬼童丸と茨木童子からはよく訊いておるぞ。お主、人類最強の陰陽術士らしいな。」

「京の都ではそう呼ばれておりますね。まあ、父上と母上には負けますがな」

「そう言いなさんな。まあ、話しはこれくらいにして…さて、闘ろうか？」

葵は闘気を纏い出す。その闘気は名に『神』とついてるに相応しい程の威圧感であった。

「私はあまり乗り気は無いですがね」

晴明はそんな闘気を柳のように受け流し、涼しい顔をしながら札の準備をしていた。

「じゃあ、合図るわよ～！3…2…1……始め！」

刹那が合図すると同時に晴明は地面を重いっきり踏み付ける。すると地面は大きく揺れた。『震脚』ってやつだ。

「！？」

晴明の予想外の攻撃に葵は一瞬動きを止める。一瞬。その一瞬のスキがいけなかった。

「『止』」

「ッ！？」

ただ一言。ただ一言、そう唱えただけで葵の動きが完全に停止した。葵は力をくわえて動こうとも、一歩も動けず、まるで自分が石になったような感覚に陥られた。

「『縛』」

晴明は札をバラ撒く。札は葵に巻き付き、身動きをさらに封じる。

「『結』」

さらに葵を囲むようにして札が配置し、保名直伝の四重の特殊な結界が葵を閉じ込める。その結界は一つ一つに力を封じる『概念』が付加されており、一つは“力”を一つは“妖力”を一つは“霊力”を一つは“能力”を封じる概念が付加されている。この結界に閉じ込められれば最期、一生出れない。（まあ刹那（れいがい）はいるが…。）

「葵殿。貴女の全ての力を封じさせてもらった。もうその結界からは出られないであろう。だから降参してくれると助かります」

無機質で無関心で無感情の反転した漆黒の瞳で晴明は葵に告げた。

普段、晴明は霊力を制限している。その制限を解くと反動により瞳が反転して漆黒に染まる。（制限を解く以外にもマジ切れしても瞳が反転する）
あと、何故制限をしているのかは修業だそうだ。

「くっ！な、めるなッ！！！」

葵は結界を破壊しようと結界をぶん殴るが、結界はびくともせず、何回も何回も殴るがヒビすらも入らず、葵の体力だけが削れていく。
二時間後。葵は殴るを止めた。どうやら諦めたらしい。

「やれやれ、降参だよ。」

やれやれと手を上げて首を横に振った。こうして決着がついたのだった。

対面そして再会（前書き）

ぐたんぐたんです。

対面そして再会

鬼と戦ってから数カ月後。
狂骨とお手玉（骸骨）して遊んでいる時、またもや帝から伝令が来た。今度は『月からの使者を撃退せよ』だってよ。月か……永琳元気にしてるかな？
てか何で『月の使者』が此処にやってくんだっけ？……あ～、思い出した。そういえば、輝夜姫が此処に居るんだっけか？確か蓬莱の薬を飲んでしまったから地球に落としたんだっけ？よく解らんがそんな感じだった気がする。いや～、すっかり忘れていたな。

「そして現在輝夜姫が居る部屋の前なう」

「どうしたんだ刹那？」

「気にすんな。私は気にしない」

「そ、そうか」

晴明が少し引いているが私は気にしない。
私は案内してくれた爺さんと婆さんに一礼し、襖を開けた。部屋の中には輝夜姫が居た。輝夜姫の表情は優れておらず、元気が無い。輝夜姫は私達に気付くと笑顔を作った。その笑顔は無理に作っているもので、見ていて辛かった。

「ようこそおこしくださいました。あなた達が平安京の最強の陰陽術士殿ですか？」

「いかにも私目は安倍晴明と申します」

「たこにも私は青山刹那よ。」

「…青山刹那？えっ、あなた、あの青山刹那なの！？ちょっ、マジでか！？やべぇこの戦勝つる！！」

先刻迄の暗い表情とは打って変わり、驚愕し、そして興奮する輝夜姫。

私と晴明は豹変した輝夜姫にドン引きして、一歩距離を置いた。

「どこかで見たことがある顔だと思ったら、まさかあの『闘神』の青山刹那だったなんて…握手して下さい！」

「え、ええ…」

「やべぇ！これ、マジやべぇわ！ヒャッハァー！」

「黙れ小僧！」

「あべしっ！」

「ちょっ！刹那！」

あまりにうざかったから思わずチョップしてしまった。だけど私は気にしない。何故なら私だから！

閑話休題。

「さて、落ち着いたかしら？輝夜姫（笑）」

「ちょっ！（笑）って何よ！（笑）って！？」

「じゃあ、輝夜姫（爆）」

「余計ひどくなっとる？！」

閑話休題

「さて、本題に入るんだが……晴明説明よろ！」

「いや、今の雰囲気だったら刹那がそのまま……まあいつものことだからしかたないな」

そう言って私の代わりに晴明が輝夜姫に説明をする。私はその間、月を眺めて思考する。

さて、どうしよっかな？晴明と私以外の帝の命により集まった１００人以上もの陰陽術士や弓隊、剣隊は月人には勝てないだろうな。てか、そもそも武器が効かないだろうな。バリアーとかで防ぎそうだし。

そんなことを考えながら月から視線を二人に移す。どうやら話しが終わったようだ。

「話しは終わったか？」

「ああ。終わったぞ」

「おk、ありがと。
輝夜姫。最後にもう一度訊くが、本当に月に帰りたくないんだな?」
私は輝夜姫の目を見て訊ねた
「当たり前じゃない!もうあんな堅苦しい生活は嫌よ!月に帰るぐらいだったら死んだ方がマシよ!」
輝夜姫は逸らさず私の目を見てそう返した。嘘偽りが無いのを確認し、私は満足して頷いた。
「理解した。
なら、私たちは全力で貴女を月の兵士から守るよ。晴明、異論は無いだろう?」
「勿論だとも。」
私の問いに晴明は笑顔で了承した。
「ありがとう」
輝夜姫は深々と頭を下げてお礼を言った
「お礼を言うのはまだ先だぜ?」
「そうですぞ。お礼を言うのはことが終わってからです」
私と晴明はそう言い、月を見上げた。
「ひっそりとこの世から消してやるよ月の使者たちよ。」

一時間後、ついに輝夜姫を連れ戻しに月から月の兵士らがやって来た。

「来たぞ！放てぇー！！！」

帝の名により派遣された兵士や陰陽術士達は月の使者たちに攻撃を返しすり。そして、予想通りバリアーみたいなのに防がれて、逆に月の武器で反撃を喰らい兵士と陰陽術士達は殺されてしまった。

「モブキャラ達は犠牲になったのだ…」

「君達のことは3秒間だけ忘れんよ」

屋根の上で私と晴明は気配を遮断し、まるで他人事のようにして惨劇を傍観していた。

まあ実際に他人事なんだけどね。とくに知り合いとかいないしな。

そういや、道満も呼ばれてたらしいけど「せつやんやせいやんがいるし、オレが行かなくとも大丈夫だろ！ってわけで旅行行ってくるわ！」って、旅行行ったからな。自由奔放過ぎるだろ。

「ん？話しが終わったみたいだな。それじゃあ晴明」

私は永琳らしき人物が矢で使者の首を撥ねるを見て、晴明に合図を送った

「了解した。『壊』」

晴明が“呪”を使者に向けて唱える。
すると突然、月の使者たちが持っていた武器が朽ち果てる。月の使者たちは武器が前触れも無く朽ち果てたことに唖然としていた。

「では、月の使者たちには退場してもらおうか。
対象は『月の使者』。対象外は『蓬莱山輝夜と八意永琳』。
影も形も遺さず消し去れ！『無影無葬』！」

月の使者たちの影から無数の手が現れて使者たちを影の中へと引きずり込んでいく。使者たちは抵抗をするがどんどんと影の中に沈み込んでいき、抵抗虚しく影の中へと消えていった。

「相変わらずえぐい技だな」

「褒めても何も出ないわよ。じゃあ行くか」

「了解だ」

私たちは屋根の上から降りて、輝夜と永琳がいる場所へと着地する。

「や、何万年ぶりだな永琳」

「……刹那…？」

永琳は私を見て目を丸くして信じられないといった表情をしている。

「をいをい、何だその目は？

そこの輝夜姫から聞いていなかったのか？」

「え？え、えぇ…。

確かに『強力な助っ人が私を守ってくれるから大丈夫よ！』って言っていたけど、まさか刹那だなんて思いもしなかったわ」

「まあね。それと私以外にもいるわよ」

そう言って、私は晴明に視線を向ける。つられるように永琳も晴明に視線を向けた。

「どうも、私目は安倍晴明です。よろしくお願いします」

「こちらこそ。私は八意永琳よ。

姫を守っていただき、本当にありがとうございます」

「いえいえ、私はあまりしてませんよ。殆どは刹那がやってしまったものですからな」

深々と感謝の意を込めて頭を下げる永琳に、晴明もつられて頭を下げた

閑話休題。

「さて永琳、月を裏切ったのはいいがこれからどうするんだ？てか、綿月姉妹はどうすんだよ？」

私はこれからのことを永琳と話し合うことにする。
（綿月姉妹とは、月の上層部の家系育ちで永琳が教育していた姉妹である。一応、私も関わりを持っているがそんなには持っていない。だけど何故かは知らんが妹の方にかなり懐かれている。）

「彼女たちなら大丈夫よ。賢いからね。
それと今後については、しばらく何処かに身を隠そうと思うわ」

「そうか。なら東に行け。
東に行った所に、確か『迷いの竹林』と呼ばれてる場所があるはずだから、身を隠すには最適だろう」

「わかったわ。ありがとう刹那」

「礼には及ばんさ」

閑話休題。

永琳と輝夜が去っていき、私と晴明だけがその場に残った。

「私らも帰るか」

「ああ、そうだな」

私と晴明は京都へと帰って行った。

不死の雛（前書き）

少し追加しますた。

駄文ですが、どぞ。

「チッ、遅かったか…」

富士の山の麓付近。私はそこにいた。理由は妹紅を捜しに来たからだ。

捜している途中、山頂付近から悲鳴が聞こえてきたので、まさか、と思い急いでそこに駆け付けると妹紅らしき人物が壷の横で倒れていた。

…どうやら気絶しているだけのようだ。

「…とりあえず、富士を降りるか。ついでに壬生にでも寄ろう」

私は妹紅を横抱きで持ち上げると『腑在証明』で壬生の地へと転移した。

―妹紅　ｓｉｄｅ―

「…知らない天井」

目を覚ますと知らない天井が目に入った。

此処は何処だろう?確か私は富士の山に登って、岩傘達のスキをつ

いて突き落として、感情に任せて薬を飲んだら……

「ダメだ。そこから記憶が無い…」

たぶん気絶したんだろう。

あの壺に入っていた薬『蓬莱の薬』を飲んだ後、体が燃えるように熱くなって、その後からの記憶が無いからそこで気絶してしまったのか…。

『蓬莱の薬』…不老不死の薬。それを飲んでしまった私は不老不死。

つまり私は――――

「気がつきましたか？」

「っ！！」

ビクッと私は肩を飛び上がらせる。声がした方に顔を向けると優しそうな男性がそこに立っていた。

多分、この人が私を助けてくれたのだろう。私はお礼を言おうとした時、彼は首を横に振った。

「いえ、私ではありませんよ。貴女を助けたのは他の人です。今は買い物に行っていていませんが…」

「えっ…！？」

私は驚いた。まるで心を読まれたかのように彼は私が言おうとして

いた言葉を返したのだ。

「あっていますよ。
私は人の心を読むことができます。正確には『感じ』とっているのですけどね。」

「そうなんですか…」

人の心を読むことが出来る、か‥‥。
でも、それって人に忌み嫌われないのだろうか?言葉を発する者は心を読まれることを忌み嫌うって言うし‥‥だったらこの人は

「ふふふ…。あなたは優しい娘ですね。
大丈夫ですよ。私には掛け替えのない心友がたくさんいますから」

彼は私の側まで来てしゃがみ込み、そう言いながら私の頭を撫でてきた。

「‥‥‥」

温かかった。彼が撫でるその手が。
懐かしかった。彼の手の温もりが。
不意に私の頬に一筋の涙が伝った。

「我慢しなくていいですよ。胸をかして上げますから、溜まっていたものを出して楽になりなさい。」

彼は私に優しくそう言ってくれた。
その言葉が引き金となり私は泣いた。羞恥を気にせず大声で泣いた。
彼はそんな私をただただ無言で優しく頭を撫で続けてくれた。

―ｓｉｄｅ―ｅｎｄ―

その後、妹紅と村正はまだお互い自己紹介していないのに気付き、自己紹介をし終えたタイミングに刹那が帰って来たので刹那とも自己紹介をし、お礼を言ったのであった。

家族が一人増えました（前書き）

やっと書けた。

無理矢理ですが気にしないで下さい。俺ですから。

次の更新はたぶん一週間以内だと思います。ではどうぞ。

家族が一人増えました

「さて、これからどうする？」

私は妹紅にそう訊ねる。

一応考えがあるが、果たしてそれを了承してくれるかどうか…。

「これから、ですか？」

「そうだ。これからだ。

蓬莱の薬を服用してしまったため今のお前は不老で不死。つまり老いることもなく死ぬこともない身体になってしまったわけだ。これはわかるよな？」

「はい…」

力弱く返事を返す妹紅

「んで、残酷じみたことを言うがそんな今のお前を京の都は受け入れてくれないだろう。……一つを除いては（ボソ」

言わずとも解る晴明の屋敷だ。あそこなら受け入れてくれそうだが、妹紅にはきついだろうな。普通に妖怪がうじゃうじゃ居るし、害を加えるかも知れないから却下だ。

「そう、ですか…」

「ああ。だけど此の地は違う。

此の地はお前を受け入れてくれるだろう。此の地は壬生と言って、

妹紅と同じ…いや、若干違うが不老で長寿の者たちが居る場所だ。
村正は若そうに見えて実は妹紅より数千年先は生きている。無論、
私もそうだが私は村正よりも長く生きている。」

「！　そうなんですか！？」

私と村正が自分より遥か年上だったことに妹紅は驚愕した

「ええ、ホントですよ」

「本当さ。私はこれでも二億は生きているからな」

「に、二億って…」

妹紅は軽く引いていた。何故だし？

「まあそれは置いといて話しを戻すわよ？
最初は村正の家に住まわせてもらおうと思ったんだけど、村正はこ
れでも忙しい身だから断念したわ。だからあなたを庵家に住ませる」

「庵家…ですか？」

「そう。庵家よ。
ああ、心配しないでいいわ。あの夫婦…っつーか父親はいまさら
一人二人子供が増えようが関係無いって言ってたし、それに結構フ
レンドリーに接してくるからすぐ打ち解けると思うわ」

買い物してた時にたまたま寿里庵に出会って、「もしかしたらお前
に家族が一人追加されると思うがどうする？」って聞いたら「大歓
迎だ！それが娘っ子だったらもっと大歓迎だ！」っつて笑っていた

からな。大丈夫だろう。伊庵も……まあ、大丈夫だろう。食費は私が払っておくし。

「どうする妹紅？」

「私は……」

「此処が庵家で今日からあなたが住む家よ。」

妹紅は庵家にお邪魔することを選んだ。

「お邪魔するぜ～」

私は一声かけてから、ガラガラと玄関を開けた。

「んぁ？ああ、刹那か。どうしたんだ？」

玄関を開けるとちょうど何処かに出掛けようとしていた庵里がいた。
庵里とは庵家の長男であり、村正の近衛隊長でもある。

「庵里か。伊庵と寿里庵はいるか？」

「お袋と親父か？だったら道場にいるぞ。今は遊庵と組み手しているな」

ふむ。それは好都合だな。その組み手に妹紅もいっしょにやらせるか？いや今はいいだろう。

「そうか。わかった。
んじゃ、勝手に上がらせてもらうぜ」

「毎回勝手に上がっているのに今更か？
ところで後ろの白髪のお嬢ちゃんは誰なんだ？」

「お前らの新しい家族になる藤原妹紅だ」

「そうだったのか。オレは庵里だ。よろしくな、お嬢ちゃん」

「えっ、あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

「元気が良いなお嬢ちゃん！そんじゃ、また後でな！」

わしゃわしゃと妹紅の頭を撫でて庵里は出掛けて行った。

……驚くと思ったんだが意外とあっさり受け入れたな。なんかつまらんが、まあいいだろう。

「とりま、あらためて邪魔するぜ」

「お邪魔します」

私達は一声かけて、家の中へとお邪魔した。遠くから「って、はぁ？！家族！？」と庵里の叫び声が聞こえたが気のせいだろう。

「……って、言うことでしばらくの間妹紅をあずかってもらえるかしら？」

事情を話して伊庵と寿里庵に訊ねる。ちなみに遊庵は伊庵との組み手で気絶している。

遊庵とは言わなくとも解ると思うが、庵家の次男だ。

「冗談で言ったんだが……まあ、言いだしっぺの法則があるしな。べつに俺はいいぜ！母ちゃんもいいか？」

「刹那には世話になっているからね。私もべつにいいわよ」

二人は快く了承してくれた。

「有り難うね。ほら、妹紅。これからお世話になるんだから挨拶しなさい」

「あ、はい。藤原妹紅です。よろしくお願いします」

ペコリと妹紅はお辞儀をした。

「おう！こちらもよろしくな、お嬢ちゃん！」

「よろしくね、妹紅ちゃん」

こうして、妹紅の居場所が決まったのであった。

壁に耳あり、隙間に目あり（前書き）

相変わらず文字けぇです。

明後日、単語のテストですが単語がまだ覚え切れてません。絶望的です。

ではどうぞ。

壁に耳あり、隙間に目あり

妹紅を壬生の庵家にあずけ、京都にいる晴明に別れを告げて、夜雀と狂骨と共に旅を再開する。それから一ヶ月経ったある日のこと。三日前から私達は誰かに観視されている。たぶん、十中八九スキマだろうな。まあ観視されても困ることはないからそのまま無視している。

「刹那様……」

夜雀が何かの気配を察知し、薙刀【八咫鴉】に手を掛ける。この薙刀は壬生にいる世界一の刀匠（自称）である寿里庵に造ってもらった薙刀である。刀とは既に会話済みでかなりの斬れ味を誇っている。

「解っているわよ」

私はなんの動作もせず、空間切断を草影に放つ。そこから『ピギャッ！？』と短い悲鳴を上げて隠れていた妖怪は真っ二つにされて絶命した。仲間が殺られたことに怒りを覚えたのかわらわらと狼に似た妖怪が姿を現した。ざっと見で５０頭はいるだろう。その中の一匹（ダーかなんか）（たぶんリー）が遠吠えをすると一斉に襲い掛かってきた。

「相手の力量ぐらい解らないかな？これだから下級妖怪は…」

私は溜息をしつつ、空間切断で飛び掛かってきた二匹の妖怪を切断する。背後から妖怪の気配がしたが抱き抱えていた狂骨の髑髏から出た大蛇によって噛み殺された。

「シッ…！」

夜雀は八咫鴉を大きく振るい妖怪を斬り飛ばした。

「神鳴流奥義『滅殺斬空斬魔蹴』！」

足先から膨大な『氣』を帯びた斬空蹴と斬魔蹴を乱れ撃ち、周囲の物と妖怪共々消滅させた。

「神鳴流は武器を選ばない。ンッン～名言だな」

さて、残るはリーダーぽいやつだな。てか『滅殺斬空斬魔蹴』をくらっても生き残っているって、随分としぶといな。いや、子分を盾にしたか？あっ、逃げ出した。だが…

「もう遅い！逃走不可能よッ！！！」

無駄無駄無駄無駄無駄ッ！とは叫ばないが、そんな感じで空圧（遠距離ｖｅｒ.）を叩きつけまくり最後だけデカイ一撃を食らわせ『引火』の異能で発火させると大爆発を引き起こした。

「っと、周囲の木々に燃え移るかもしれんな。消火、消火っと」

『空』で豪風を作り出して、残り火を消し払った。

「前々から思っていましたけど、刹那お姉様の能力って底無しなんですね！」

元気な笑顔を見せる狂骨。うん、可愛いな。

っと、拗ねるなよ夜雀。お前も可愛いからさ♪

そう思いつつ二人の頭を撫でる。

「そうだね。私は７９３２兆１３５４億４１５２万３２２２個の異常性（アブノーマル）と４９２５兆９１６５億２６１１万０６４３個の過負荷（マイナス）、合わせて１京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６５個のスキルを持ち、未だ増え続けている異能を持ち合わせただけの人と妖を平等に見るただの人外だからね。

いや、異常性の『無警戒（ノー・アラート）』を夜雀に『口写し（リップサービス）』したから異常性は７９３２兆１３５４億４１５２万３２２１個になっているから今は１京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６４個しか無かったね。」

完了型の『口映し（リップトレース）』をすればスキルは減らないのだが、本来より若干威力が落ちるから『口写し』の方がいいんだよな。まあ『口映し』の場合は異能（若干威力が落ちるが）も移せるから使い勝手がいい。

てか『完全（ジ・エンド）』もしくは『完了（エンド・オブ・ジ・エンド）』によって、異常と過負荷と異能が増え続けているから実際は１京以上いってるかもしれないんだよな。

ＨＡＨＡＨＡ

「「ありすぎです」」

二人にツッコまれた。だが私は気にしないぜ！

あ。そうそう。話しは変わるのだが、私は夜雀に二つのスキルを身につけさせた。そのスキルとは『無警戒（ノー・アラート）』と『巫女息吹（セイレーン・ブレス）』である。

『無警戒』とは、相手に近づいたりしても姿を見られたり自分から話し掛けたりしない限り絶対に気付かりたりはしないスキルだ（いわば敵意・やる気が無い状態）。さらに攻撃するさい、相手の“直感”や“勘”・“反射神経”などの類が発揮しなくなる。

『巫女息吹』とは、有機物・無機物を問わず全てのモノを惑わし操る歌。さらに脳に直接作用するため相手を操ったり、歌を自身に効かせて強化することも出来るのだ。

狂骨にもスキルを渡そうと考えているのだが、中々決まらない。大蛇つながりで『三つ巴（スリー・キラーズ）』のスキルでも渡そうかしら？まあ難にせよ考え中である。

「ところで刹那お姉様。何処に向かっているのですか？」

狂骨がそう訊ねる。
いい質問ですね～。

「私達が向かっているのは『太陽の畑』って言って、辺り一面向日葵が咲き誇っている向日葵畑よ。」

「向日葵畑ですか？」

「そうよ。…嫌だったかしら？」

私はわざと不安気な表情をすると狂骨は重いっきり首を振り出した。

「いえいえいえ！　そんなはずありません！ありえませんよ！そうよね、夜雀！」

「私は刹那様が行く場所であるならば何処までも…」

夜雀は静かにそう返して、腕を私の腕と絡ませてきた。

「そう。ならいいのよ」

私は微笑みを浮かべて、太陽の畑へと歩いていった。

「『人間と妖怪を平等に見る…』か。彼女ならきっと私の理想郷の現創に協力してくれるはず…。」

太陽の畑へ（前書き）

相変わらずの駄文です。

あ、昨日ネギま！の映画を観に行きました。ハーレムエンドとか・・・ケッ。それとまさかあの『先生』が出ていたとは驚きです。

ではどうぞ。

太陽の畑へ

私達の眼前には辺り一面に向日葵畑が咲き誇っていた。

「これは…」
「すごい」
「きれい…」

「美しいな…」

噂程度には聞いていたが、まさかここまで美しいとは思わなかったよ。

「そうですね。ここまで綺麗に咲き誇っている向日葵を見たのは初めてです！」

ぴょんぴょんと跳びながら興奮する狂骨。うん、愛らしいな。

いや～、それにしても…

「本当に美しいな、此処」

「あら、ありがとう」

「…ん？」

誰だ今の声？狂骨のでもなければ夜雀のでもない。…まあ予想はついているけどね。此処、太陽の畑だし。

声がした方を振り向くと、そこには日傘をさして笑顔でこちらを見ている緑髪の女性・・・風見幽香が立っていた。しかし目は笑っていなし、殺気を撒き散らしていた。
先刻まではしゃいでいた狂骨と私の腕に引っ付いていた夜雀は幽香の殺気に気付き、自分の武器に手を添えていつでも戦闘に入れるよう臨戦態勢に入っていた。

「おや、あんたは？」

私は殺気（それ）をとく気にせず幽香に訊く

「私は此処の管理人よ」

幽香は日傘を閉じて笑顔でそう返した。しかし目は（ｒｙ

「ほぅ、そうだったのか。結構な地に旅をしているが、此処までの立派に咲き誇った向日葵畑を見るのは初めてだよ」

「お褒めに与り光栄だわ」

ニコニコと笑い合う刹那と幽香。場に一瞬の緊張が走る。幽香は笑顔のまま間髪入れずに日傘を刹那に振るう。・・・が、日傘は『空』で創られた空気の壁に防がれて、刹那に攻撃が届くことはなかった。

「あら？」

「ん？どうかしたか？」

私は今にも攻撃をし出しそうな夜雀と狂骨を手で制し、変わらぬ表情で幽香に訊ねる。・・・不慮の事故（エン・カウンター）で受け止めればおもしろそうだ

ったな。まあただの戯言だけど。

「あなた、一体何をしたのかしら？」

「さあ？一体何をしたんでしょうね？」

くすくすと笑い合う二人。二人から滲み出る異様な気に当てられて夜雀と狂骨は息を呑む。しばしの沈黙が流れる。

「ふぅ…」

幽香は小さく息をつくと日傘を開いて自分の肩に乗せる。そして先刻まで撒き散らしていた殺気を霧散させて、次に発っした言葉に夜雀と狂骨の二人は驚愕した。

「久しぶりね、刹那」

「ああ、久しぶりだな幽香」

※ここまで出てきたキャラ（前書き）

キャラ設定みたいなものです。強さはあくまでも目安みたいなものなんであまり気にしないで下さい。

それとネタバレ（小）ありです。

※ここまで出てきたキャラ

名前：青山　刹那
片字：アオヤマ　セツナ
性別：男性（男の娘）。
種族：闘神（元人間）。
性格：基本優しい。しかしキレると恐い。Ｓッ気あり。
姿形：黒髪黒眼。腰まである髪。白黒の着流しを着ている。
能力：めだかボックスの『異常』と『過負荷』。ＣＯＤＥ：ＢＲＥＡＫＥＲの『異能』。
武器：護太刀【雪月花】。
強さ：通常時・上級神やソロモン７２柱以上。本気時・勝てる気がしない（笑）。
備考：夢で選択られた謎の現象により、ひょんなことから過去（ジュラ紀）に転移してしまった主人公。人外に好かれやすい体質で、多くの神や悪魔・天使や妖怪などの友人がいる。勿論、人間の友人もいるが八割は人外が占めている。あと気持ち良く寝ていたところを起こすとかなり不機嫌になり、不機嫌状態の刹那を女と間違えると死ぬより辛い地獄を見ることになる。

名前：天音　迅
片字：アマネ　ジン
性別：男性。
種族：鬼神。
性格：冷静沈着。たまに天然。
姿形：後方のアックァ。髪は朱い。
能力：速度を司る程度の能力。
武器：哭刀【雛】。魄刀【梟】。

強さ：通常時・幽香以上。本気時・神綺以上。本気時＋鬼發（三本角仮面着用時）・刹那（八割力解放）と互角かそれ以上。
備考：刹那の最初の旅仲間であり相棒であり心友。出逢いは戦場で刹那とは敵同士だったが刹那に気に入られ、成り行きでともに世界を旅することになった。かなりの年月を共に過ごし、それ故か刹那とは固く強い絆で結ばれており、ある程度のことならお互い何を考えているのかが解る。あと元鬼の四天王で、鬼童丸の師でもある。
現在は一人で旅をしている。

名前：安倍　晴明。
片字：アベノ　セイメイ。
性別：男性。
種族：人間。
性格：基本優しいが、キレるととてつもなく恐ろしい。
姿形：ぬら孫の安倍晴明。
能力：陰陽術。保名直伝格闘術。
武器：札。小太刀。
強さ：通常時・土蜘蛛以上。本気時・本気の幽香と互角。
備考：安倍保名と羽衣狐（葛の葉）の間に生まれた子。京の都最強の陰陽術士と呼ばれている。蘆屋道満とは親友でありよきライバルである。普段は力を抑えていて、それを解放すると瞳が反転する。
羽衣狐がいなくなったさい、代わりに京の都の妖怪たちを使役している。式神に鬼童丸と茨木童子がいる。

名前：安倍　保名／羽衣狐
片字：アベノ　ヤスナ／ハゴロモギツネ
性別：男性。／女性。
種族：不老長寿。／八尾。

性格：大胆不敵。／大和撫子。
姿形：ＢＬＥＡＣＨの京楽春水を若くした感じ。／ぬら孫の九尾（現代版の方）。
能力：陰陽術。自己流格闘術。神鳴流。／陰陽術。畏。鉄扇合気道。
武器：札。閻魔の脇差し。／札。尾。鉄扇。日本刀。三叉槍。
強さ：通常時・上級の妖怪以上。本気時・天照大御神と同等。／通常時・晴明より上。本気時・保名と同等。
備考：保名は安倍晴明の父親で元真の壬生一族であり不老長寿の秘薬を造り出した者の一人でもある。羽衣狐は安倍晴明の母親であり初代・先読みの巫女であった。二人はひょんなことから出逢い、意気投合をして付き合い、付き合い始めてから数年後にめでたく結婚した。結婚してから数年後に子（後の晴明）を産み、壬生の地を離れて京の都で倖せに暮らしていた。現在は壬生の地に再び戻り、健全だった家で暮らしている。あと毎日イチャラブっていて砂糖を吐いた妖怪（ぶか）が多数いたといふ。

名前：夜雀
片字：ヨスズ／ヨルスズメ
性別：女性。
性格：寡黙。
種族：夜雀。
姿形：顔と頭を狐文字で書かれた経文で覆い、髪をそれで束ねている。ポニーテール。
能力：異常の『無警戒（ノー・アラート）』。『巫女息吹（セイレーン・ブレス）』。畏。
武器：薙刀【八咫鴉】
強さ：通常時・中の上クラスの人妖以上。本気時・上の中クラスの人妖以上。
備考：青山刹那の最初の従者。小さい頃に妖怪に襲われていた時、刹那に助けられた。それ以来、刹那と主従を交わし、刹那に付き従

っている。刹那のことが大好きで、刹那に仇す者なら問答無用に排除する。

名前：狂骨。
片字：キョウコツ。
性別：女性。
種族：狂骨。
性格：好奇心旺盛。
姿形：幼女。
能力：畏。
武器：髑髏の中にいる無数の蛇（？）。
強さ：通常時・中クラスの人妖以上。本気時・上の下クラスの人妖以上。
備考：元は羽衣狐の部下であった妖怪。羽衣狐のことを“お姉様”と呼んでいて、刹那のことを“刹那お姉様”と呼んでいる。

名前：鬼童丸。
片字：キドウマル。
性別：男性。
種族：鬼。半妖。
性格：義理堅い。
姿形：強面の老人。
能力：剣術。畏。
武器：二つの日本刀。
強さ：通常時・中級妖怪以上。本気時・鬼の四天王より上。
備考：酒呑童子（伊吹萃香ではない）の実の息子で、人間の女の間に生まれた半妖。酒呑童子が病で亡くなり、母親が寿命で亡くなった時、酒呑童子と仲良かった羽衣狐に引き取られた。それ以降から

羽衣狐に付き従っている。それから何百年が経ち、刹那と迅に出会い剣術を習う。鬼の四天王の最後の一人であった迅から座を譲り受け、最後の一人の座になっている。妖力が高まると徐々に顔の表面を鬼の面が覆っていく。現在は晴明の式神兼四天王をしている。

名前：茨木童子。
片字：イバラキドウジ。
性別：男性。
種族：鬼。
性格：かなり短気で好戦的。羽衣狐にもタメ口をたたく。
姿形：鋭い眼をした青年。顔の半分は卒塔婆で隠れている。
能力：剣術。畏。
武器：二つの日本刀。
強さ：通常時・中級の妖怪以上。本気時・鬼童丸と互角。
備考：酒呑童子（伊吹萃香では（ｒｙ）を親と決めて慕っていた。酒呑童子が病で亡くなった際、酒呑童子の亡骸を切り刻み、自分の左頬に埋め、かつて共に目指した鬼の世界を作り上げるまで、そこを酒呑童子の墓場にすると心に決めた。妖力が上がるとこの卒塔婆が外れ、真の力を発揮する。しかし同時に、血を好む残虐な本性が顕わにもなる。その世界を少しでも早く実現させるため羽衣狐の部下へとなった。それから何百年か経ち、刹那と迅に出会い、剣術を習う。現在は晴明の式神兼鬼の四天王の三人目をしている。あと茨木華扇という妹がいる。

名前：無果実　葵。
片字：イチジク　アオイ。
性別：女性。
種族：鬼子母神。

性格：大雑波。
姿形：スタイル抜群☆
能力：正々堂々を操る程度の能力。
武器：拳。
強さ：通常時・鬼童丸より上。本気時・本気の幽香の少し下ぐらい。
備考：鬼の総大将であり母親。鬼の中で最も強い。元鬼の四天王の最後の一人であった天音迅に淡い恋心を抱いている。

名前：空海。
片字：クウカイ。
性別：男性。
種族：修羅。
性格：某紅い髪の偉丈夫。
姿形：紅い髪の偉丈夫。
能力：必ず中てる程度の能力。
武器：三叉戟【捩華】。
強さ：通常時・鬼子母神以上。本気時・鳴神流（ナルカミナガレ）と互角。
備考：桜花とは幼馴染み。刹那の強さに憧れて自ら眷属になった。普段は天界で桜花と鍛錬をしている。たまに地上に下りて釣りをしている。刹那の【畏】で発動する『天獄城』の時に地上に現れて共に闘う。

名前：桜花。
片字：オウカ。
性別：女性。
種族：羅刹。
性格：某腹ぺこ騎士王。
姿形：銀髪の長髪で凛々しい。

能力：概念を無視する程度の能力。
武器：長刀【雅】。
強さ：通常時・鬼子母神以上。本気時・鳴神流と互角。
備考：空海とは幼馴染み。刹那の強さに惚れて自ら眷属になった。普段は天界で空海と鍛錬をしている。たまに刹那と手合わせをしてもらっている（その時の桜花はとても嬉しそうな表情をしていたという。※空海談）。刹那の【畏】で発動する『天獄城』の時に地上に現れて共に闘う。

名前：鳴神流。
片字：ナルカミナガレ。
性別：男性。
種族：人間。不老長寿。
性格：お気楽。破天荒。
姿形：黒髪紅眼。オールバック。着流し着用。
能力：神鳴流。鳴神流。
武器：陰刀【霧雨】。陽刀【晴天】。
強さ：通常時・村正と互角。本気時・壬生京一郎と互角。
備考：京の都で神鳴流を広げた男性。流は壬生出身であり、数少ない真・壬生一族でもある。流は神鳴流の創造者であり、自己流の神鳴流…鳴神流を創った。それが出来る者は鳴神本人だけであった。
今は病で亡くなり天界で桜花と空海と手合わせしながら楽しく過ごしている。

誤解を解こう（前書き）

いつも通りのgdgdでごわす

誤解を解こう

二人は先刻までの空気が嘘だっかのように談笑し始めた。

「少し力下がったんじゃないのか？昔の幽香だったらあのぐらいの空気の壁を突破できたと思うんだが」

「最近、弱い人間や妖怪しか来なかったからね。嫌でも力が落ちるわよ」

はぁ…、と溜息をつく幽香

「それならしゃーないな。だったら強い奴を紹介するぜ？事情を話せば手合わせぐらいはしてくれるだろう」

私が言った言葉にピクリと反応する幽香

「へぇ～、それは誰かしら？」

幽香は興味津々のようだ

「安倍晴明だ。近・中・遠距離戦が得意な京の都最強の陰陽術師で安倍保名と葛葉の狐の息子でもある」

「あの保名の…」

幽香は興味深気に呟いた。

幽香は一度だけ安倍保名と闘ったことがある。結果は惨敗。圧倒的

な強さの前に敗北した。
簡単に人を消滅させる程の魔砲を撃つが結界で防がれ、接近戦に持ち込んでも自分より上手で致命的な傷を負わせることが出来ず、最後は四重結界に封じられて負けた。

「そう。保名のよ。
しかも京の都の妖怪を使役している存在でもあるわ」

「妖怪を使役しているって…陰陽術師としてそれはどうなのかしら？」

「べつにいいんじゃない？人それぞれだし」

「そんなもんかしら？」

「そんなもんだろ」

「あ、あの…！」

驚きからいち早く復帰した狂骨が刹那に声をかける。刹那はそれに反応して狂骨の方を振り向く

「何かしら？」

「し、知り合いなんですか？」

「ええ、昔っからのね」

狂骨の質問に刹那は頷き答える

「じゃあ先刻の攻撃は…」

「あれはお決まりの挨拶みたいなものよ。べつに殺す気でやったわけじゃないし、てか私の力じゃ殺せないしね」

今度は幽香が答える。

「え？　じゃああの殺気は…？」

「あれはいつもの癖みたいなものよ。私の畑にちょっかいを出してくる妖怪を追い払うためのね。まあ警告でもあるわ」

今度も幽香が答える。

「それに私じゃ彼を殺せないわよ。一度戦って解ったわ」

「まあそういうことだから、心配させちゃってごめんね」

そう言って私は狂骨の頭を撫でた

「私も心配した…」

ぎゅっと夜雀が後ろから抱き着いてそう呟いた

「ん。　夜雀も心配させちゃってごめんね」

夜雀の頭も撫でた

「相変わらず、人外に好かれているわね」

幽香は優しい笑みを浮かべながら私たちを見てそう呟いた。

「まあね。」

短く返事をし、二人をたっぷり撫でて頭から手を離す。

「ところで何しに此処に来たのかしら？」

「噂の向日葵畑を見に来たのよ。そしたら偶然、幽香に会ったってわけだ」

「そう」

「さて、そろそろ私達行くわね。」

「あら、そうなの？
もっとゆっくりしていけばいいじゃない」

「ん～…、やっぱり行くわ。また逢いましょう、幽香」

「ええ、またね」

私達は太陽の畑を後にした。さて、次は何処に行こうかな？

妖怪の山へ（前書き）

迷走してたでごわした。

英単語とか英熟語とか覚えられないよ。

駄文ですが、どうぞ。

妖怪の山へ

太陽の畑で幽香と別れ、私達一行は妖怪の山へと向かっている。理由は迅が「千年物の酒を空けるのだが一緒に呑まないか？」と誘われたからだ。私はそれに二つ返事で返して、今何処にいるかを聞いてそこが妖怪の山だったから向かっているってわけよ。『腑罪証明』で迅の妖力がある場所に転移(いけ)ば早いけど、私達は旅をしている身だからそんな卑怯な手を使わず自らの足で歩いている。

・・・っても、実際に歩いているのは私だけだけどね。夜雀は黒い翼で飛行していて、狂骨は頭を骨で隠した大蛇に乗って移動しているし。

「先に行けば行く程妖怪の数が増えてめんどいわね。しかも少しずつだけど強さも上がってきてるし…」

愚痴りながら迅の妖力を辿って、草むらから飛び出してくる野生の妖怪どもを斬り伏せていく。

まあ強さとか上がっても私達の敵ではないけどね。レベル1が2に上がった程度だし。

「そこの者ども止まれ！！此処から先は立入禁止だ！！」

「ん？」

空からそう聞こえてきたので見上げると、一人の白狼天狗がいた。

そんな白狼天狗を見て、私は微笑んで――――：

――先を進んだ。

「おいィ!?」

白狼天狗がなんか叫んでるが私は気にしない。

ふむ。迅が『千年物の酒』を空けるなら、私は『万年物の酒』を空けようかしら?確か酒の神様から貰ったやつが何本かあったはずだ。あと昔、永琳に教えてもらって自作した『億年物の酒』もあるが…あまり数が少ないから空けなくていいだろう。

「待て待て待てぇ～い!!!」

シュバッ!と先程の白狼天狗が私達の前に立ちはだかった。遊んでほしいのかしら?

ったく、しょうがないわね～。

「少しだけよ?
ほら。取ってきなさい!」

「!　(ダッ」

私はそこら辺に落ちていた枝を手に取り、重いっきり彼方へとぶん投げた。

キュピーン!と目を光らせたその白狼天狗は、彼方へと投げられた枝を追い掛けて飛んでいった。

…まさかホントに取りに行くとは思わなかった。まあ天駆ける狗（略して天狗）と呼ばれるぐらいだし、しかたないか。狼も確かイヌ科だったし。

「さて、行くわよ」

「「はい」」

私は白狼天狗が消えたのを見て、先へと進んだ。

・
・
・
・
・

～一時間後～

「はぁ、はぁ、まさかあんな攻撃をしてくるとは思いもよりませんでしたよ…」

先程、枝を取りにいった白狼天狗がまたもや私達の前に立ちはだかった。今度は仲間を連れて。

てか左手に枝持ってるよ。律儀に取りに行ったんだな、あの天狗。

「ですが！今回はそうはいきません！
ずいぶんと先へ行かれましたが、此処から先は通すわけにはいきません！多少手荒な真似になりますが、あなたたち彼女らを捕まえて下さい！」

「「「「「はっ！」」」」」

枝を取ってきた白狼天狗の命令に従い、周りにいた白狼天狗たちは私達を捕らえようと襲い掛かってくる。てか、あの白狼天狗偉い奴だったんだな。部下がいるってことは、リーダーかなんかか？

とりあえず、襲ってきた白狼天狗たちを私は螺子で木や地面に縫いつけた。あまりにも早かったため、白狼天狗たちは反応出来ずにあっさりと縫いつけられてしまった。

「えっ…？」

一人の白狼天狗が声を漏らす。まあその反応をしてしまうのは無理がない。私達を捕らえようとした瞬間、いつの間にか木や地面に螺子伏せられていたんだからなね。それも一匹足りとも気付くことがなく。

「はっ？」

命令を出したあの白狼天狗のリーダー（一々、白狼天狗付けるのめんどくさいからリーダーでいいや！）も何が起きたのかが解らずア然としていた。

「さて、残るはあなた一人ね。」

「な、なにをしたんですかあなたは！？」

ビシリ！と手に持っていた枝を私に突き出しそう聞いてくるリーダー。見て解らないのかしら？

「何って、見ての通りただ螺子伏せただけよ？
ああ、安心しなさい。ちゃんと急所は外して着物だけを狙って螺子伏せたから。」

べつに殺す必要とか無いしね。そこら辺の知能が低い妖怪とは違い、妖怪の山に不審な者がいないかを哨戒する天狗だし。

「ねじ伏せただけって…
何でただの人間がそんなこと出来るんですか!?いや、でも両隣に妖怪いますし…はっ！もしかして妖怪!?」

リーダーはテンパり、自問自答し、そして自己解決する。

や、どうしてそうなった？他にも陰陽術師とか武士とかあるだろう。
まあ、確かに妖力とか持っているけどさ…。

「違うわよ。私はまごうことなき（元）人間よ。んで、この二人は私の従者と連れよ。」

「……（コクリ」
「よろしくね～」

夜雀は軽く会釈をして、狂骨は元気よく手を上げた。

「えっ、人間？！
アーリエンナー！」

かなり驚愕するリーダー。
てか何よ、その『あうぅん』でおなじみの主人公出てきそうな生物災害の空耳みたいな驚き声は？

「“元”だけどね。
まあそれはさておき、貴女に一つ聞きたいことがあるのだけれどもいいかしら？」

両手に持っていた螺子を消して、リーダーに向かい訊ねる。訊くのは勿論、迅のことだ。
いちいち妖力を辿りながら行くのがめんどくさくなってきたので、このリーダーに訊くことにした。妖怪の山にいるのだから、居場所ぐらい知っているだろう。

「な、何ですか…？」

身構えるリーダー

「そう身構えなくても…ただの質問よ。
この山に私の心友（とも）の天音迅っつー鬼神がいるはずなのだけども、何処にいるか知っているかしら？」

その名前した瞬間、場の空気が凍った…ような気がした。気のせいか？

「天音迅…？　えっと、天音迅って、まさか、あの天音迅さんですか？」

聞き返してくるリーダー。
質問を質問で返さないでほしいのだけれども。まあいいや。

「どの天音迅かは解らないけど、元鬼の四天王の最後の一人で双太刀使いの速度を司る鬼神の天音迅だったらその人よ？」

そう答えると何故かは知らないがリーダーの顔が蒼白くなった。リーダー以外にも螺子伏せられてる白狼天狗も顔が青いような…。
あれ?迅って、そんなに恐れられているのか?いや、ありえないだろう…っつーかありえ無い。恐怖の要素が一欠けらも無い。まあ私から見たらだけどね。

「あ、あの、名前をお伺いしてもよろしいでしょうか?」

怖ず怖ずした態度で私にそう聞いてくる。何故敬語になったし?

「いきなりね。まあいいわ。
私はただの『最凶で最狂の最恐であり最強である闘神』で元人間の青山刹那よ」

「すまんかった」

そう答えたら突然リーダーが土下座をして謝ってきた。

何でやねん。

鬼の里（前書き）

十月最初の更新。
相変わらずの駄文具合。

果てしなく眠いです。
ではどうぞ。

鬼の里

リーダーに話を聞いてみた。

リーダー曰、天狗達のボスである大天狗×3と天魔が何をとち狂ったのか迅に喧嘩を吹っ掛けて、その内の大天狗の一人が暴言を吐いたらしく、それに迅がキレて鬼發（三本角の鬼面着用）状態になりその大天狗を瞬殺した。残りの大天狗二人と天魔と観客していた鬼子母神が死に物狂いで止めていなかったら、迅の畏に当てられて妖怪の山は何も活きていない死の山へと代わっていたそうだ。その憤怒の迅（こうけい）を見てから天狗達は迅を恐れているらしい。

今思えば迅の声、どこか不機嫌だったな。

・・・にしても迅がキレるとはね。迅がキレる時はだいたい心友か仲間を冒涜された時ぐらいだろう。ということはその大天狗（おろかもの）は仲間を冒涜したのかな？それだったら自業自得だ。

私も心友や仲間を馬鹿にされたらキレるさ。そしてその馬鹿にした奴を迅のように瞬殺しないで、じわじわとたっぷり死なないように加減して殺すよ。例えるなら、めだか箱で夢の中の安心院が球磨川にやっていたやつをやるかな？骨を一本ずつ壊していく拷問のやつをね。

「それで迅はどうしたの？」

「その後は、迅さんは無言のまま帰って行きました」

リーダーもとい犬走楓がそう答える。

ちなみに私達は楓に迅がいる『鬼の里』に案内をさせている。というよりか、謝罪の意を込めて自らそう言ってきたので案内を任して

いる。
あ、螺子伏せていた白狼天狗達は仕事場に帰って行ったわよ。帰るさいに私達に敬礼していたが……何故に？

「着きました」

そんなしょーもないことを考えていたら目的地に着いたようだ。

「それでは私はこれで…」

と言って、帰ろうとしていた楓の襟首を掴む。

「ぐェっ!?　な、何でせうか？」

「あなたも一緒に来なさい。」

「えっ!?　でも、私には仕事が…」

「大丈夫。命の保証はするわ。それに滅多に味わえない酒も呑めるわよ？」

「むっ!?　いや、でも仕事が…」

一瞬、『滅多に呑めない酒』で反応したんだけどあくまでも仕事を優先するか。さすがはリーダーね。

まあ…

「拒否権は無いんだけどね」

「ですよねー」

楓をズルズルと引きずりながら私達は鬼の里に入っていった。

―鬼の里―

里……っつーか集落に入ると、なんか雰囲気がどんよりとしていた。

鬼の里だから騒がしいと思ったんだけど、、、。

「なんか空気が重いですね。どうしたんでしょうか?」

狂骨はと歩いている鬼達を見てそう呟く。

確かに変よね。迅関係かしら?もしくは鬼子母神か?いや、可能性的には迅が濃いわね。

「おや?　あんた達は…」

「ん?　お前は確か勇儀か。」

向かい側から鬼の四天王の一人、星熊勇儀が歩いてきた。どこかしら元気が無い。

「何しに来たんだい?

生憎、今は取り込み中だから用件を早く言ってくれないかい?」

ハァ…、と勇儀は疲れた顔でため息をはく。

「んじゃあ単刀直入に。
迅が何処にいるかわかるか？」

そう訊ねると勇儀の顔が強張った。
その反応から見ると、やはり迅関係か。

「迅さんに用なのかい？
なら、今はやめておいた方がいいよ。あることがあって、迅さん不機嫌中だから。そんじゃあね」

そう返して勇儀は何処かへと行ってしまった。
にしても、迅が不機嫌なだけで何で周りにも影響しているのだろうか？

まあ、私にとっちゃどうでもいいことなんだけどね。

・
・　・
・　・　・

「着いたっと、」

迅の妖力を辿りながら里を歩いて、だいたい１０分。迅が居るであろう屋敷に到着した。

「なんか、禍々しい妖気を感じますね」

狂骨が言った通り、屋敷からは禍々しい妖気が発している。それに耐性がある私はいいが、狂骨と夜雀は冷や汗を流していて、楓にいたっては顔面を蒼白である。

「ああ…。こりゃあそうとう不機嫌だね。ったく、その大天狗（おろかもの）は何を言ったんだか…。取り敢えず、あなた達はここで待っていなさい。此処から先は私だけで行くわ。機嫌直し終えたら呼ぶわね。」

「「「わかりました」」」

三人は素直に頷く。そして私は屋敷へと入っていった。

・・・・・・・・・

「此処だな。失礼するぜ～」

障子を蹴り破って迅の気配がある部屋の中に入る。シリアス展開なんて“無い”ぜ？私が“なかった”ことにしたからな！

部屋の中には迅が静かに鎮座していた。

「…相変わらずだな、お前は」

私に気付くと閉じていた瞼を開き、顔をほころばして、そう言った。

「当たり前だぜぃ！
それにしても、どうしたんだ迅。なんか不機嫌っぽい雰囲気を出してるじゃないか？
なんかあったか？お兄ちゃんに言ってみな。そしたら少しは楽になるぜ？」

私がそう訊くと、迅はその時のことを思い出したのか眉に皺を寄せた。

「べつに何でも無い…」

「そうかい。言ってくれんのか。
まあべつにいいんだけどね。勝手に『受信』させてもらったしな」

私はへらへらと笑いながらそう言った。
なるほろなるほろ。不機嫌になった理由は、私と鬼子母神の冒涜か。
いや～、嬉しいね。私のために怒ってくれたのか。最高の心友を持ったよ私は！

「『受信感度』か…」

「ご名答♪　まあそれを使わなくても解っていたけどね。
いや～、そう言った理由だったら流石に言いにくいよな。」

「・・・」

私は迅の隣りに座り、影から万年物の酒を取り出してドンッ！と置いた。迅はそれを怪訝な表情で見る。

「それは？」

「万年物の酒だ。お前は酒を空けると言っていただろう？
お前が千年物を空けるなら、私は万年物を空けるわ。」

そう言った私に呆れた表情をする迅

「どういう理屈だ」

「屁理屈だ！（キリッ」

「・・・そうか」

どこか諦めた表情をして迅は千年物の酒を取り出して栓を開ける。
そして用意していたのであろう二つの杯に注いで、一つを私に渡した。

「「乾杯」」

チンッ―と杯を交わして、酒を一口呑む。
うん、旨い。さすが千年物の酒だな。

「時に迅よ。連れを外に待たせているのだが、呼んで来ていいか？」

何杯か呑んだ後、迅にそう訊ねる。迅は少し間を空けてこくりと頷いた。

「ありがとよ。じゃあ呼んでくるな」

私はみょんみょんと念話を夜雀に送り、中へと来させる。数十秒後、

障子が開き、夜雀と狂骨そして夜雀に引きずられながら楓がやって来た。
夜雀は引きずっていた楓から手を離し、私の隣へと腰を下ろす。楓は「ぐえっ」と蛙が潰されたような声を出して畳に伏した。

「夜雀と狂骨か…」

「久しぶり…」
「お久しぶりです！」

夜雀は小さく会釈をし、狂骨は元気よく返した。

「ああ、久しぶりだな。それと…誰だ？」

迅は楓を見てそう呟く。楓はそれに反応して直ぐさま立ち上がると、軍人並の早さで気を付けをする。

「わ、私は哨戒天狗第一部隊隊長の犬走楓（いぬばしりかえで）と言います！」

よろしくお願いしまする！、と楓は迅に敬礼をした。
その敬礼の形は軍人顔負けの美しい姿勢を正していた。

「あ、ああ。よろしくな」

少し引き気味に迅は言葉を返した。

「さて。役者も揃ったことだし、続きでもしますか！」

私は異能『原子』で杯を三つ構成し、酒を注いで三人に手渡す。そして杯をかかげて、

「「「「「乾杯」」」」」

チンッ―と五つの杯が合わさり音を立て、杯を傾けて一気に呑み干した。

鬼の里（後書き）

あとが。

異能『原子』

「存在するありとあらゆる原子を構成・分解することができる。だが新たに原子は創ることかできない。それ意外は構成することは可能である。」

ぷち会と（前書き）

1，2週間ぶりに更新。

単熟語テストの追試とかで小説を書く時間がががが…。

ではどうぞう。

ぷち会と

酒を呑み始めてからだいたい五時間が経ち、辺りには千年物や万年物の以外の酒瓶が散乱していた。
酒に強い刹那と迅は酔い潰れていないが、狂骨と夜雀の二人は酔い潰れてしまい、狂骨は刹那の膝元で夜雀は刹那の背に寄り掛かるようにして寝ていた。それと意外や意外に楓は酒に強いのかほろ酔い程度で済んでいた。

「このお酒美味しいですね。何処で売っていたのですか？」

「これは自作だ。だから何処にも売ってはいない」

「自作なんですか！？　すごいですね～」

最初は緊張していた楓だが、迅が恐い人ではないと解り徐々に緊張が解けていって、今では会話ができるほど調子を取り戻していた。

「ところで迅。あなたの【畏】の『鬼神城』って創造（つく）れたの？」

杯を傾け、私は迅に訊く。

鬼神城（キシンジョウ）とは、私の畏で創る『天獄城』と同じ種類のものだ。
私の天獄城は白く染まった空間に禍々しく神々しい混沌と秩序をさらけ出し醜悪と美善な城が現れて前鬼の修羅と後鬼の羅刹を召喚しともに闘うのにに対し、鬼神城は黒い空間に禍々しい妖気を放つ城が現れて迅が杯を交わした鬼（やから）を召喚しともに闘う。

「９割程完成しているが決定的な『何か』が足りなくて悩んでいる」

「“何か”がねぇ…。まあ、頑張ってその『何か』を見つけなさい」

「そのつもりさ」

くいっ、と二人は同時に杯を傾けて酒を飲み干し、互いに酌を交わして酒を注いだ。

「あの～、一つ質問していいですか？」

楓は小さく手を上げる

「何かしら？」

「“畏”とはいったい何々ですか？」

楓は首を傾げて質問をする。

そういえば楓は『畏』を知らなかったわね。まあ当たり前か、『畏』を使ってるのは極一部の妖怪や鬼だけだし、使えるかどうかは力量によるしな。一応、説明してあげるか。

「『畏』というのは、“恐怖”“威圧感”“信仰”“尊敬”“憧れ”などの様々な形(いみ)を持つ言葉であるけど、簡単に言っちゃえば『妖怪の力』を総称したものよ。

いわば妖怪同士の化かし合いね、どちらかが先に『ぎょ！』っとなって驚いた方が負け的な。」

「んで、その『畏』の発動のことを鬼發(はつ)と言って、相手を怖がらせたり威圧して能力を発揮させるわ。」

「鬼發、ですか？」

「そう、鬼發よ。
そして、これが鬼發よ」

「ッ！（ゾワリ」

私は『畏』を発動させる。
楓は私の『畏』に当てられて“恐怖”をして顔を青褪める。私はぬらりと楓の認識をずらして背後に回ろうとしたが、その前に夜雀と狂骨をゆっくりと起こさないように下ろして、そして楓の背後を取った。

「と、こんな感じで相手に“恐怖”を与えた時に鬼發が発動するわ。」

「っ！？　いつのまに背後を」

驚愕する楓に、私はにっこりと微笑みながら続ける

「まあ『畏』の種類は妖それぞれだけどね。
ちなみに貴女の背後を取った『畏』は妖怪の総大将と呼ばれていたぬらりひょんの『畏』よ。名は明鏡止水といって、周囲から視認されなくする業よ。」

私は元の場所に座ると膝の上に狂骨と夜雀の頭を乗せて頭を撫でた。
髪サラサラやな～。

「そうなんですか…。
その『畏』って、刹那さんと迅さん以外に使える方っているんです

か？」

ぬらりひょんについてツッコミ無しか、てか今思ったんだが初代ぬらりひょんはこの世界にいるのかね？晴明や鬼童丸、茨木童子がいるくらいだからたぶんいるだろうけど、今度出遭ったら話し掛けてみるかね。てか珱姫と出会いとかどうなったんだろうか？まあそんなことはどうでもいっか！

「刹那さん・・？」

「おっとすまない、少し考え事をしていたよ。私達以外で『畏』を使える奴のことだったな。まず最初は今酔い潰れている夜雀と狂骨、次に鬼の鬼童丸と茨木童子、あとは八尾の羽衣狐と陰陽術士の晴明と保名ぐらいかしらね、私が知る限りだと」

何故人間である晴明と保名が『畏』を使えるのかは、簡単にいえば保名の場合は羽衣狐と性交したさいにパスが繋がったからだろう、晴明の場合は保名と羽衣狐の息子だから妖怪の血が流れているからだろうな。まあ、べつに妖怪じゃなくても『畏』は使えるけどね。

「そんなにいるんですか。
・・・その『畏』というのは、私にも出来るのでしょうか？」

楓はどうやら『畏』に興味を持ったごようすだ

「それは先刻も話したように、己の妖力しだいよ。あとは鍛錬かしらね？
それと言い忘れていたけど、鬼發の他に鬼憑というのがあるわ。これは己の『畏』を武器などに移し、技として昇華させ、『畏』を以って『畏』を破る対妖怪用戦闘術。例えを上げるなら、茨木童子の

『鬼太鼓桴“仏斬鋏”』や鬼童丸の『羅城門』かしらね。茨木童子の場合は刀に鬼憑させて技を放ち、鬼童丸の場合は具現化させて業を放っているってところかしらね。」

「武器に移して、技を昇華させたり、具現化させたり出来るんですか……。『畏』というものは凄いんですね。私も使えたらな～……。」

まあ無理でしょうけどね、とシュンと楓の犬耳と尻尾が垂れ下がり、ため息を吐いて落胆をした。……可愛いな。

「いや、そうでも無いぞ」

今まで黙っていた迅が呟く。その言葉に楓の犬耳はピクリと反応し、ガバッと顔を勢いよく上げた。

「えっ！？　本当ですか！」

「ああ。妖怪には必ず『畏』といったものがある。やろうと思えば誰でもできるものだ。」

「じゃあ、何故それをする人が少ないんですか？」

「それは『畏』の発動の“鬼發”とその『畏』を武器に移して、技を昇華させる“鬼憑”の仕方を知る者が少ないからだ。」

それに『畏』はマイナーだからな、と迅は続けて言った。

「それじゃあ私にも出来るんですか！！」

「ああ。理論上はな。

刹那、楓に『アレ』を頼めるか？」

そう迅が聞いてきた。『アレ』って、、、、ああ、『アレ』か！

「『アレ』ね。まあ別にかまわんよ。

・・・と言うことなので、楓ちょっとこっちに来なさい」

ちょいちょい、と手を招いて楓を呼ぶ。楓は『アレ』とはいったい何か頭上に“？”を浮かべながらこちらに来た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2546r/

東方夢現紀

2011年10月21日04時07分発行